

釈迦を越えた日

— 科学宗教の到来 —

滝沢 輝



釈迦を超えた日 ～科学宗教の到来

はじめに

科学と宗教。20世紀まで、この2つの概念は対立していました。科学者は宗教的な考え方を無視して理論を構築し、社会全体を席卷したのです。宗教家は科学に圧倒されながらも、精神の重要性を訴え続けたのでした。

科学者は現象を客観的に捉え、数式化します。するとこの計算式はいつでも成立するのです。ですから、科学は絶対だ、と主張するのです。・・・客観性とは何なのでしょう。

認識が全て脳を通じて行なわれているとすれば、全ての人の認識は脳で情報が処理された結果です。情報処理前の状態を経験した人はいないのです。ですから、科学のいう客観性とは、脳の情報処理パターンを意味しているのです。しかし、我々が目にする脳は、我々の脳が情報処理した結果にすぎません。情報処理前に、本当に脳は存在したのでしょうか。このように考えると、脳の存在すら確認できないことがわかります。

このような思考を続けると、本当に実在しているのは、我々の意識そのものであることに気がつきます。意識こそが、この世界の成立要因だということです。

自分なりに精神の向上を目指して努力を続けた結果、今では全ての人を自分自身の内面に映し出すことができるようになりました。ここには目には見えない秩序が存在しています。高低があるのです。光の強い人が高く、弱い人が低い位置に存在しているのです。そしてこの高低こそが、本当の人間の格であることに気がつくのです。

1999年7月、私は釈迦の高さを超えてしまいました。その後も向上を続け、2000年にはこの世界、創造された世界を越えてしまったようです。この高さに到達すると、世界の創造原理が徐々に見えてきます。そうすると、従来は対立すると考えられていた科学と宗教が、実は同じことを意味していることに気がつくのです。

このようにして理解した法則を説明し、同時に霊的な認識を深めていただくために本書を記しました。この法則は単に精神的な向上に役立つだけではありません。経済問題等、現代社会の諸問題をも解決可能とするのです。物事の根本を理解することにより、あらゆる問題が解決可能となるのです。それは豊かな社会生活に直結します。全ての人が物心両面で豊かになれるのです。

私はこれを「科学宗教」と名付けました。21世紀の人類発展に必要不可欠と思われる研究分野です。その可能性、重要性をぜひ確認していただきたいと思います。

2001年4月

目次

まえがき

第一章 積徳のすすめ

第二章 精神世界の構造

第三章 意識のはたらき

第四章 生命力の算出

第五章 社会生活と霊位の向上

第六章 内面意識の活動

第七章 積徳の法則

第八章 意識の向上

第九章 向上の軌跡

第一章 積徳のすすめ

積徳の重要性

精神・宗教的なことに関心を持ち始めてから、かれこれ16年が経過しようとしています。その結果、精神的なことに関する理解がかなり進みました。そろそろまとめて発表する時期だと思い、本書を記すことにしたのです。

一般的に、宗教は死後の生活のために存在すると思われているようですが、誤りです。

宗教は精神の向上、人間性の向上を説きますが、これは現在の我々の生活に直接影響を及ぼしています。人間性が向上すれば社会全体は安定し、逆に人間性が下落すれば社会は不安定になるのです。

最近の日本は昭和時代の勢いを失っています。原因が明確にはなっていないようですが、一つだけ明らかな点があります。精神の喪失です。最近の日本人は精神の重要性を見失っているようです。

戦後に国民主権が確立されてから、個人の自由が主張されてきました。これが「何をするのも自分の勝手」という風潮につながり、社会全体が安易な生き方、楽な生き方に傾いたのです。また、学校では知識教育が重要視され、精神性が顧みられなくなりました。それでも戦争経験者が社会の中心を占めている間は精神の重要性は保たれていたようです。しかし戦後生まれの人々が社会の中心世代となるにつれ、社会全体から精神が徐々に失われてきたのです。

人の精神、意識には高さがあります。成長度に差があるのです。この差はそのまま能力差を意味しています。精神的に成長している人ほど能力が高いのです。何かを成し遂げようとする時に、達成する能力が高いのです。ですから人は常に精神の向上を目指さなければならないのです。

精神の成長は、徳を積むことにより達成されます。「積徳」イコール「精神の成長」となるのです。目に見えない世界には人の序列があります。人の精神、意識の序列です。立派な人ほど高い位置にあります。そして、この高さを決めるのが、徳なのです。徳の多い人ほど高い位置にいるのです。

本書では徳の量のことを「積徳量」「生命力」と呼ぶことにします。徳とは生命力そのものです。徳、生命力は靈感で捉えると、輝いています。光なのです。我々はこの光を消費することにより、日々の活動を行なっているのです。そのため、生命力は日々追加供給されているのです。

生命力が我々のあらゆる活動量を規定しています。肉体エネルギー・仕事での成功・収入・成績・理解力・創造力・活躍・人々の賞賛等、あらゆる事柄には生命力が関与しているのです。生命力と引換えに、我々はこれらの能力を駆使しているのです。ですから人が成功する鍵は、いかに多くの生命力を獲得するかということなのです。日々多くの生命力を得ることができれば、活躍することができます。少なれば、小さく生きることしかできません。

日々供給される生命力は一定ではありません。人により差があります。立派な人、精神の成

長している人ほど多くなります。ですから、人格者ほど活躍することができるのです。社会全体で積徳に励み、多くの人々の精神が向上すれば、社会全体に供給される生命力が増加することになります。結果的に、社会全体が発展、向上することになるのです。

最近の日本が低迷しているのは、精神を喪失したためです。精神の重要性が忘れられたため、国民の精神的な完成度が低下しているのです。結果として人々の生命力が減少し、国家全体の活動量が低下してしまったのです。経済が成長しない根本原因はここにあるのです。

ですから日本の勢いを取り戻すためには、国民全体が精神の重要性を認識し、その向上のために努力しなければならないのです。その努力が国家の活動量の増加につながり、社会の発展につながるのです。

景気回復のため、経済的な理論が幅を利かせているようですが、これらの理論だけで現状を説明することはできません。社会を構成するのは人です。人を解明しなければ、社会やその状況は解明できないのです。

人は精神で活動しています。ですから、精神の法則を理解する必要があるのです。その法則とは、人格の向上が能力向上につながり、社会の向上・発展に直結するということです。そのためには徳を積む必要があります。積徳と人格の向上とは同じことです。人格の向上なしに徳を積むことはできません。

生命力の法則

徳を積むことの重要性は以前から認識されていたのではないのでしょうか。人格を磨くためには欠かせない行為だからです。しかし積徳に励む人は少数派です。ほとんどいないのかもしれませんが。何故積徳が継続的に行なわれないのでしょうか。

徳は貯金のように考えられているのではないのでしょうか。

「積徳しても使えばなくなってしまう。だったら後で使うか今使うかの違いにすぎないから、今使ったって構わない。大差ない」

という考え方です。この発想では、徳を積む行為は決して重要視されることはありません。しかし、この考え方は間違いのようです。

現代社会は諸々の技術により支えられています。特に中心になっているのは家電製品かもしれませんが。電気を使わない生活など、もはや想像できないくらいです。しかし、これらの製品・技術は偶然開発されたわけではありません。前提となる知識・法則が発見された結果、その応用として製品の開発が行なわれたのです。中心になったのは物理学の法則等です。ですから基本的な法則の発見は、我々の生活を根底から変える可能性を秘めているわけです。

物理の法則は全て数式から成り立っていますが、これは大切なことを我々に伝えています。この世界は全て、ある一定の法則下で成立しているということです。人工衛星が日常生活に欠かせない現代では、この事実を疑う人はいないでしょう。

しかし、物理学の成立はそれほど昔の話ではありません。大成者のニュートンは17世紀の人物です。それ以前は、自然の動きを数式で表すことなど考えられていなかったのです。従来は考えられていなかったことが法則として発見され、それが実生活に応用された結果、現代のような便利な社会が構築されたのです。このように新たな法則の発見は、社会を豊かにするのです。

「生命力に法則がある」

というのは、言いすぎでしょうか。しかし、事実のようです。人の存在は生命力そのものです。生命力の大きい人は大きく活動することができ、小さい人はあまり活躍することができません。

このような差は明らかに存在します。子供の頃から成績優秀でスポーツ万能、エリートコースを突っ走る人もいれば、苦勞に苦勞を重ね、貧しい生活を続ける人もいます。能力差だといってしまえばそれまでですが、なぜ能力に差があるのでしょうか。そこが重要です。その差こそが、生命力の差なのです。

日々供給される生命力には差があります。生命力の供給量には一定の法則があるのです。それは

「生命力の供給量は積徳量に比例する」

という法則です。積徳量とは生命力の大きさです。日頃から社会のために貢献している人は、積徳量が多くなります。徳の多い人ほど、社会に貢献する人といえます。こういう人の活動量が増えると、社会が大きく発展します。ですから、生命力の供給量が増えるのです。

社会全体を見渡してみると、立派な人、人格者ほど能力が高いことに気がつきます。この高い能力は、生命力の大きさを意味していたのです。

人格者だから積徳量が増える、積徳量が多いから生命力が多く与えられる、生命力が多く与えられるから高い能力を発揮することができる、という関係になっていたわけです。

もし徳がゼロ金利下の貯金のように増えることのないものであり、引き出して消費すれば終わりだとすれば、数十年に渡って活躍を続ける人々がいる事実を説明できません。高い地位の人は高い能力を要求されるため、生命力の消費量も普通の人より多いのです。ですからどんなに積徳量の多い人でも、それだけで高い地位を長期間維持することはできないのです。生命力の供給量が多いからこそ、高い地位を維持できるのです。

積徳量は人により様々です。多い人もいれば、少ない人もいます。中にはマイナスの人

もいます。ですから日々の供給量が積徳量の単純な比例だとすれば、日々生命力が奪われる人がいることになり、不都合です。実際には最低の供給量が決められているようです。徳の少ない人でも、一定量の生命力は与えられるのです。この生命力を生かせば、生活を送ることができるわけです。

この法則はインスピレーションで浮かんできました。我々人類は天界の指導下にあります。ですから生命力も天の計算により与えられているのです。国内総生産（GDP）も、この数式で概ね把握できてしまいます。生命力の供給量を金額換算することにより、どの程度の経済規模を営むことができるか、概ね計算できるのです。

最近日本は不景気だといわれていますが、その原因は生命力の低下にあるのです。積徳量が減少したためです。最近の日本人は、以前に比べ「努力」「まじめ」ということを軽視する傾向にあるのではないのでしょうか。バブル期の愚かさも影響したのでしょうか。積徳量が減少すれば、日々供給される生命力が減少します。結果として経済規模が縮小するのは当然なのです。

ですから、景気回復に必要なのは経済理論ではありません。「精神の回復」です。日本人が精神を取り戻すことにより、景気は自然に回復するのです。逆に精神の喪失を続ける限り、景気が本格的に回復することはありません。積徳量が減少すれば、経済規模は縮小するのです。我々はこの法則を十分認識しなければなりません。

第二章 精神世界の構造

精神世界の構造について説明します。精神には高さがあります。高い世界や低い世界があるのです。本書では精神世界のことを霊界、その高さのことを霊位と呼ぶことにします。

霊界の構造

霊界は階層構造になっています。この階層にどのような種類があるのか、以下に説明したいと思います。用語は全て造語です。

霊位	段階	内容	日本人
全体意識		全人類の意識の総体。	
如来界		個体意識と集合意識の一体化。菩薩の指導者レベル。	
菩薩界	5	緩衝地帯（菩薩と如来の中間）。	
	4	国王クラス、釈迦、キリスト。	数名
	3	準国王クラス、各界トップクラス。	約 100 名
	2	各界のエリート。	約 1300 人
	1	各界で活躍する人々。	約 5 万人
上級霊界	5	平均以上の人々。菩薩に比べると積徳量が少ない。	約 50 万人
	4		約 700 万人
	3	同じ結果を得るために、多くの努力を要する。	約 1300 万人
	2		約 1400 万人
	1		約 1500 万人
中級霊界	1~5	平均レベルの人々。積徳量は 0 に近い。	約 4100 万人
下級霊界	多数	積徳量がマイナスの人々の世界。	約 3600 万人

(人数は 2001 年 4 月末現在)

全体意識

全体意識とは全意識の発生源のことです。我々の意識は全て全体意識から発生しています。個人の意識は「全体意識」の部分的な意識です。人類は意識の奥底ではつながっているのです。

全体意識には姿、形はないようです。意識だけの存在といった感じです。次にどのような世界を構築するかを常に考えているようです。

如来界

如来は全体意識から放射された意識です。地球人類の集合意識も如来レベルの意識です。

如来レベルとは一即多、が実現している世界です。個としての意識がありながら、同時に多にもなるのです。全体意識の一部であることを自覚しながら、同時に集合意識でもあるわけです。

大日如来や阿弥陀如来と呼ばれる方々も、この世界に位置しています。大きな光の塊のような存在です。

存命中で霊位がこのレベルに到達している人は、ほとんどいないようです。

菩薩界

菩薩は如来から放射された意識です。本書では主にここから下の世界について説明しています。

大別して 1～5 と五段階で把握しています（1が低く、5が高い）。

5段目は如来界と菩薩界の中間レベルの世界です。

4段目は国王レベルの人々の世界です。釈迦やキリストといった宗教界の最高峰とされている方々の意識もこの世界に位置しています。

3段目は準国王レベルの人々の世界です。各界のトップクラスの人々がここに位置しています。

1、2段目は各界エリートの世界です。有名スポーツ選手やテレビで活躍する人々は、このレベルに位置する人が多いようです。存在感のあることが特徴かもしれません。

日本人全体の0.04パーセント程度の人が、菩薩界に位置しているようです。社会の中心で活躍を続ける人々は、大体このレベルに位置しています。

上級霊界

上位レベルの人々の世界です。日本人全体の40パーセント程度がここに位置しているようです。

努力を重ねる人々の世界です。積徳量が平均より多いため、普通の人より大きな成果を上げることができます。しかし菩薩界の人々よりは少ないため、なかなかトップに到達することができません。

中級霊界

平均的な日本人の世界です。積徳量がゼロに近い状態のため、特別な成果を上げることは困難です。

下級霊界

自己中心的な想念の人々の世界です。平均以下の世界です。積徳量がマイナスになっています。努力よりも成果が少ない状態を続けることによって、マイナス分の穴埋めをしなければなりません。

霊界の諸相

霊位は生命力の圧力、強さの違いと考えることができます。上位世界は人の発生元であり、生命力が強く、明るい世界になります。下位世界ほど生命力は弱くなります。

霊位の高い世界を高次元、霊位の低い世界を低次元とも呼びます。次元は多数存在しています。

我々は地球人類として一つの次元に属しているのです。肉体は一つの次元に属していますが、霊位は人により千差万別です。

感覚的には、精神のレベルを高さの差として感じるすることができます。高次元は高い所に位置しており、低次元は低い位置に存在するのです。ですから高次元、低次元という呼び方をするので。

死後に行く世界は死んでから決まる、と考えている人がいるかもしれませんが、そうではありません。世の中には積徳量の多い人もいれば、マイナスの人もあります。霊的感覚が発達すればこの状態は把握可能です。つまり、生きている人の霊位も確認できるのです。肉体消滅後、その霊位の世界に移行するのです。移行先は生前に決定されているわけです。

しかし、苦しんで亡くなった場合などには、想念が歪んでしまいます。この想念の歪みにより、本来の霊界に移行できない場合があります。この場合、その人に高次元の光をあて、想念の歪みを消去することにより、本来の霊界に移行させることができます。これを「浄霊」と呼びます。

第三章 意識のはたらき

我々の世界で最も重要な役割をしているのは、人の意識です。一般的には神経作用としか思われていないようですが、誤解です。意識がこの世界の成立要因です。本章を通じて意識の重要性を認識していただきたいと思います

意識の構造

意識の構造について考えてみましょう。我々の通常の意識を「表面意識」と呼びます。通常の感情や思考は、全てこの意識から発生していることとなります。

しかし意識はこれだけではありません。我々の内面にさらに意識が存在しています。これを「内面意識」と呼びます。魂、霊と呼ばれることが多いようです。

内面意識の状態は様々です。人により異なります。人は高次元から発生した生命力、光です。この光が分かれることにより、個人としての意識が発生しているのです。ですから高次元へ回帰することも本来は可能なのです。しかし、多くの人々はその事実を忘れていたため、能力が退化しているのです。回帰しなくなった結果、多くの人々が孤立化しているのです。孤独感を感じているのです。しかし、この感覚は人により異なります。内面意識が高次元にある人ほど、全体とのつながりを意識し、低次元の人ほど孤立感を強く感じているのです。

多くの人々の内面意識は上級霊界以下に位置しています。この場合、意識は胸の中にあるような感じになります。意識が肉体に束縛されているような状態です。我々の肉体には霊界全体が表現されているようです。意識の高さが肉体の場所に表現されているのです。そして上級霊界と菩薩界の境界は首筋、あごの高さになるようです。上級霊界は意識の歪み、曇りのある世界ですから、ここに内面意識がある間は、光を放射することはありません。

菩薩界に内面意識が到達すると、頭の高さに意識が移行します。高次元ほど高い位置になります。頭頂部が最も高い霊位、意識の発生源に該当するのです。菩薩界は意識の曇りの無い世界ですから、ここに内面意識が到達すると、光を放射します。オーラの発生です。オーラは菩薩界以上の人々が放射しているのです。仏像等で表現されているオーラ（後光）は肩の上や頭の周囲に表現されていますが、これは発生源である内面意識が頭部に位置しているからです。オーラは頭部から発生しているのです。

内面意識の高さを決めているのは、徳です。積徳量により、基準となる高さが決められているのです。この高さが霊位なのです。積徳量ですから霊位が極端に動くことはありません。徐々に動くこととなります。

しかし、内面意識の方向は動きます。たとえば、表面意識で誰かを思い浮かべると、内面意識ではその人の内面意識を捉えます。心地よく感じる人もいれば、気持ち悪い人もいます。この感覚の相違は、対象となる人の内面意識の状態によるのです。霊位の高い人ほど、心地よく感じるのです。ですから、霊位の高い人ほど人気があるのです。

芸能界等で活躍する人々は、大体菩薩界に位置しているようです。オーラを放射しているため、輝いて見えるのです。

意識のバランス

意識には上下の二方向があります。上方は周囲の人々や全体と一体化する方向です。下方は自他分離の方向、自己を主張する方向です。

上方に意識を向けて生活すれば、霊位は向上します。周囲の人の為に努力し、社会に貢献する人は、積徳量が増えることになり霊位が向上するのです。全ての人は本来一体なのです。その方向が上方ということになります。

逆に下方に意識を向けて生活すれば、霊位は下降することになります。自己主張、自分勝手な想念行為を継続すると、周囲との一体感がなくなり、孤立してしまいます。この方向が下方ということになります。

この世界が存在する為には、上下両方向の意識が必要です。上下両方向の意識の交点が、我々の世界なのです。物質も両意識の交点のようです。どちらか一方の意識だけでは世界は成立しません。科学では意識と分離した、客観的な物質を想定していますが、誤りのようです。

社会の安定には、両意識のバランスが欠かせません。バランスが崩れると、社会は不安定になります。上下両方向の意識の調和が必要なのです。

表面意識が下方の意識に該当し、内面意識が上方の意識に該当しています。我々の通常の意識、表面意識は常に自己、個性を認識していますが、内面意識では常に全体との一体性を認識しているのです。

上方は全体方向への意識ですから、この意識が強調されると、バラエティーに富んだ社会の構築は不可能です。個性が育たないのです。

下方は自己中心的な方向への意識ですから、この意識が強調されると、自我、我欲の世界になります。社会は混乱して無秩序になり、崩壊してしまうのです。

表面意識が強くなると内面意識が弱くなるのです。霊位は下降してしまいます。内面意識が強くなると表面意識が弱くなります。自己主張はしなくなるのです。宗教家に物静かな人が多いのも、内面意識主体で生活するためです。しかし、内面意識の働きが強すぎるため、社会生活をバランスよく送ることができない場合が多いようです。生産活動を行なわないのも、その一例です。

積徳行為は周囲、全体へ奉仕する想念行為ですから、上方への意識に該当します。ですから、積徳を続けることにより、霊位は向上するのです。

現代社会は圧倒的に下方、即ち自己中心的な方向に人類の意識全体が傾いています。結果として社会が混乱しているのです。

民主主義の意味が誤解されているのでしょうか。個人の権利を主張するあまり、社会全体とし

での調和が失われているのです。調和が失われては、個人も存続できません。全体と個のバランスが重要なのです。

意識はエネルギーです。エネルギーバランスが崩れているのです。下方エネルギーが強すぎる結果、社会が混乱しているのですから、上方エネルギーが必要なのです。上方エネルギーの強化が、社会に秩序をもたらすのです。

第5次元の導入

如来界に意識が到達すると、不思議な感覚を得るようになります。高速の回転体を観じるのです。自転しながら、らせん形を描いていく感じでした。しばらくして、それが我々の世界を意味していることに気がつきました。この世界は意識の高速回転により成立しているようです。私が認識したのは菩薩界以下の世界のようなものでした。

物質は原子や分子から構成されている、と科学は説明しています。原子はさらに電子と原子核から構成されており、原子核はさらに細かい粒子から構成されているわけです(素粒子論)。

しかし、電子や原子核を実際に見た人はいません。理論は確立されているのですが、実物は確認できていないのです。ですから、素粒子の存在は仮説にすぎません。素粒子と呼ばれる作用は存在すると思いますが、それは粒子以外の働きなのではないでしょうか。

感覚的には、意識の高速回転により、全ての存在が映し出されているようです。意識が回転した結果を、ある定点から認識することにより、我々はこの世界を認識しているのです。この際、意識の方向は縮退してしまうため、通常は認識できていないようです。要するに、意識の方向自体はつぶれてしまっているのです。隠れているのです。ですから、今まで誰も気がつかなかったのです。

物理学の理論では、回転はそれほど重要視されていないようですが、実は我々の世界は全て回転体で構成されています。地球は自転しながら、太陽の周りを公転しています。太陽も銀河系の周りを回転しています。また、電子は原子の周りを回転しているのです。全て回転しているのです。回転が世界の構成原理なのです。

意識の方向は新たな物理的次元だと思われれます。従来は縦、横、高さ、時間の四要素が物理の次元と考えられていましたが、ここに意識という次元を加えることにより、物理学は完成すると思われれます。第五次元の導入です。

尚、霊界の次元と、物理的次元は意味が異なります。霊界では1つの世界を1次元と捉えています。この世界が1つの次元になるわけです。物理的次元はその構成要素を意味しています。

霊的な存在を否定する人々は、「霊界なんてどこにある」と思うかもしれません。しかし、これも5次元を導入すれば説明可能なようです。5次元は意識の方向です。この方向を軸とした回転が、我々の世界の成立要因です。

回転数がポイントです。回転数の相違により、多数の世界が構成可能になるのです。回転数が多い世界は、物質の多い世界になります。精神的な要素が軽んじられ、物質至上主義的な世

界になります。現在の我々がこの世界に属しているわけです。一方、回転数が少なくなると、物質の少ない世界になります。物質感が希薄になり、精神主体の世界、光の強い世界になります。前者が低次元、後者が高次元に該当するのです。

意識の回転数の変化により、新たな世界が多数現出します。霊界では次元が多数存在するのです。無限ではありませんが、かなり多くの世界が存在するものと思われます。

仏教では成仏すること、彼岸に到達することが目標とされています。この彼岸とは回転数の少ない世界のことだったのです。我々の世界が高速回転の世界なのに対し、低速回転の世界を彼岸と呼んでいたのです。

従来の物理学は、宗教と一体化することができませんでした。それは理論が不完全だったためです。現在、力の統一理論作成に大勢の物理学者が挑戦していますが、解決の目途が立っていません。個別の理論（電磁力、重力、強い力、弱い力）が不完全なのです。第5次元の導入により個別理論を再構築すれば、統一理論も完成可能と思われます。そして、統一理論の完成はそのまま異次元の存在を証明するはずで、その異次元こそが、霊的な世界に該当するわけです。この段階に来て初めて科学と宗教が融合可能になるのです。

科学と精神の融合は人類全体にとって莫大な富、豊かさをもたらします。この融合こそ、人類の進化にとって最も重要なのです。

ピラミッドパワーの秘密

ピラミッドの形に不思議なエネルギーが存在することは、以前から知られています。しかし、その原理を解明した人はいません。現代科学ではそのパワーの本質を理解することができないのです。理論が不完全なためです。

ピラミッド形は意識の形のようなものです。我々の意識には形があるのです。先ほど、この世界は意識の回転により構成されていると説明しました。この世界は我々の意識に内包されているのです。意識で世界を構成しているのです。

この世界の特徴は、形から構成されていることです。すべて何らかの形をもっているのです。誰もこの事実に疑問を感じていませんが、形から構成されなければならない理由は本来存在しないのです。極端な話、音楽で構成されている世界があっても不思議ではないのです。

世界が形から構成されているということは、意識に形が内包されていることを意味しているのです。即ち、我々自身が形を持っているのです。それを意識上に表現しているわけです。それがこの世界なのです。

その基本形がピラミッド形のようなものです。ピラミッド形の意識の回転により、この世界は構成されているのです。

意識の回転により構成されているのは、菩薩界以下の世界です。如来界は菩薩以下の世界を規定しているようです。ですから、如来界の存在原理にピラミッド形は関与していないように

す。菩薩界以下の世界にピラミッド形が関与しているのです。

「認識」が何を意味するのか、科学的にもよく分かっていません。物を認識するというのが、具体的に何がどうなった状態を意味するのか、誰にもわからないのです。しかし、これも自分の意識で全てを生み出しているとすれば、簡単に理解できます。

「存在」イコール「認識」イコール「意識の作用」なのです。要するに、物の存在自体が認識なのです。意識の働きなのです。

ピラミッド形が意識の形だとすれば、ピラミッドパワーの原理も理解できます。ピラミッドの形を思い浮かべれば、意識の回転が停止するわけです。ピラミッド形は原型ですから、意識回転の停止により構成することができるのです。意識の回転が停止した世界は、ピラミッド形の関与しない世界に該当します。即ち、如来界です。ですから、ピラミッドパワーは如来界のエネルギーに該当するのです。高次元エネルギーです。如来界の神霊と同等のエネルギーをピラミッドは保有しているわけです。

ピラミッド形の秘密を全て解明したわけではありません。今後も追及が必要です。本文も感覚的に捉えた内容が大部分であり、今後検証が必要なのは間違いありません。更に理解が進んだ段階で、詳細な内容をお伝えしようと思います。

第四章 生命力の算出

生命力や徳というものは抽象的な概念と考えられています。しかし、それは違うようです。自然界の現象を計算式で表すことができたように、積徳量、生命力も計算式で表すことが可能です。考え方を一部説明します。

オーラの法則

最近オーラという言葉が流行っていますが、使い方は人により異なっているようです。ここでは菩薩界以上の人が放射する光について説明したいと思います。

黄金分割比という言葉をご存知でしょうか。この世界の構成原理として使われている（と思われる）不思議な数のことです。具体例で説明しましょう。

ある線分を長い部分と短い部分に分けたとします。このとき、「全体の長さ」対「長い方の長さ」と「長い方の長さ」対「短い方の長さ」の比が同じになるようにします。この時の（全体／長い部分）の比のことを、黄金分割比と呼ぶのです。φという記号が黄金分割比として一般的に使われているようですから、本書でもφを使用します。φは $(1 + \sqrt{5}) / 2$ という無理数になります。小数で表せば、1.618・・・となります。

尚、この黄金分割比は、ピラミッドでも使用されています。ピラミッド底辺の二分の一の長さ、斜面の三角形の高さとの割合が、φになっているのです。

黄金分割比の特徴は、その美しさです。二辺の比が黄金比の長方形はもっとも調和のとれた長方形といわれているようです。

オーラとは何の関係もなさそうですが、オーラの大きさがちょうどこのφの割合で大きくなっていくようなのです。菩薩界を5段階に分けましたが、1段上昇する毎に、オーラの大きさがφ倍になるのです。

私の場合、色つきでオーラが見えるわけではありません。雰囲気を感じるのです。勢いのある人、人気のある人ほど大きなオーラを放っています。そして、その大きさが霊位と密接な関係にあるのです。

オーラは頭を中心部のやや後ろから放射されるようです。頭の後ろ側、肩の上に柔らかな雰囲気を醸し出します。オーラの形は円形ではありません。上の方向に大きく伸びるようです。頭を中心部から横方向のオーラの端までの長さを、オーラの半径とします。

オーラを放射するのは菩薩界一の霊位に到達してからです。この段階では半径30センチほどの大きさのようです。人気のある芸能人やスポーツ選手の多くは、これ以上のオーラを放射しています。霊位が菩薩界の人が多からいます。

30にφを乗ずることにより、各霊位でのオーラの大きさを把握することができます。菩薩界2の霊位では半径50センチ、菩薩界3で半径80センチ、菩薩界4で半径130センチほ

どのオーラを放射することになります。

具体例を説明しないと理解しにくいかもしれません。巨人軍の長嶋監督は、2001年3月時点で菩薩界の3.4の高さに位置しています。準国王クラスの方なのです。写真でオーラの大きさを確認すると、半径一メートル程度の大きさになっています。ミスターの愛称で親しまれ続ける理由は、そのオーラの大きさにあるのです。人格者だからこそ、人から愛されるのです。

先ほどの計算式では、30センチに ϕ の2.4乗を掛ければいいわけです。そうすると95センチになります。計算結果とオーラの大きさがほぼ一致するわけです。

国王クラスになると、半径130センチ以上のオーラになるわけですから、まさに光輝いて見えるわけです。釈迦やキリストもこのレベルの方々ですから、強力なオーラを放射していたものと思われます。

なぜオーラの大きさが ϕ 倍になるのでしょうか。オーラとは生命力の放射のことです。そして、生命力には圧力があるのです。この圧力が霊位1段の上昇で ϕ 倍になるため、オーラの大きさも ϕ 倍になるのです。生命力の圧力が ϕ 倍になる霊位の差を、1段差と定義していたということです。

初めからこのように霊位を定義したわけではありません。感覚的に一段差と感じたから、そのように定義したのです。後でオーラを確認したら、 ϕ 倍になっていたのです。

以前は大きな雰囲気をしていた人が、久しぶりに会ってみると、小さな雰囲気になっている場合があります。こういう場合、何らかの理由で生命力が減少し、霊位が低下しているのです。その結果、オーラが小さくなって人間が小さく見えるのです。

我々は大きな人間を目指さなければなりません。大きな人間は輝いて見えます。そのためには積徳が欠かせないのです。霊位の向上は全ての人に必要なのです。

格闘技の場合、強い選手は威圧感が高くなります。ヒクソン・グレイシー選手が無敗神話を続ける理由も、その霊位の高さに理由があるのです。霊位が高い人は圧力が高くなるのです。霊位が1段上昇すれば、威圧感は ϕ 倍になるわけです。この威圧感はそのま気の圧力になり、筋力の強さに直結するため、霊位が2～3段違えば圧倒的な力の差になるのです。格闘技で強くなる秘訣は霊位の向上です。

2001年3月25日、PRIDE13において、プロレスラーの桜庭和志選手が、ブラジルのバンダレイ・シウバ選手にKO負けを喫しました。たった98秒の試合でした。テレビで見たのですが、桜庭選手の状態が以前とはずいぶん違っていたようです。

グレイシー一族に4連勝を飾った桜庭選手でしたが、その頃に比べオーラが小さくなりました。霊位も1段程度下降していたようです。試合前日に風邪をひいたことが原因かもしれませんが、それだけではないようです。露出しすぎで徳が消滅していたのです。CM出演や他

の活動を行なったことが、霊位の低下を招いたのです。結果的にオーラが小さくなり、圧力が低下して、間合いがとれなくなっていたのです。こうなると、試合中に余裕がなくなるのです。その結果、シウバ選手の仕掛ける打撃戦に応じてあっさり敗北してしまったのです。以前ならば間合いをとって、相手の様子を見ていたはずですが、圧力低下により、間合いをとることができなかったのです。

対するシウバ選手は絶好調だったようです。試合時の二人の霊位差は1段程度、シウバ選手が上回っています。ですから試合結果は順当だったのです。

以前の桜庭選手ならば、圧力に関しては互角だったのではないのでしょうか。後は技の勝負ということになります。格闘家は格闘技に専念した方がいいと思うのですが、いかがでしょうか。

生命力の算出

世界の構成原理は意識の回転だと説明しました。そのエネルギー源が光、生命力ということになります。霊位とオーラ、生命力の圧力に相関があるということは、霊位と生命力の大きさにも一定の法則があるということの意味しているのではないのでしょうか。

振動体の場合、エネルギーは振動数の二乗に比例します。霊位の一段差は、回転数にして ϕ 倍の差になっているようです。ですから、霊位が一段上昇すると、生命力は ϕ の二乗倍になると思われます。

ϕ の二乗は約2.6です。ですから積徳量、生命力が2.6倍になると、霊位が一段上昇するわけです。感覚的に捉えた内容ですが、ほぼ正しいと考えています。

我々が日々享受している生命力、光は積徳量、即ち生命力の大きさに比例しています。霊位の五段下の光を日々享受しているようです。霊位が菩薩界1の人ならば、上級霊界1の人の積徳量、生命力と同じ量の光を、日々の生命力として享受しているのです。

霊位一段差で積徳量は2.6倍になるわけですから、霊位が1段上昇すれば、日々供給される生命力は二.六倍になるわけです。活動量が2.6倍になるのです。頭が2.6倍良くなるのです（と考えることもできます）。

少なくとも上級霊界3の積徳量、生命力と同程度の光が、1年間分の生命力として全ての人に供給されているようです。積徳量がマイナスの人や、少ない人がこの状態になります。

菩薩界3に位置している人は、この生命力を1日で享受しているわけです。ですから、供給の少ない人に比べて、365倍の活動が保障されているわけです。様々な活動、活躍を通じて人々から賞賛されます。理解力が高いため、頭もいいのです。理解には多くの生命力が必要なのです。

この法則を不平等だと感じる人がいるかもしれませんが、しかし、人の霊位はすべてその人の想念、行為が決定しているのです。立派な人が高い位置にいて、そうでない人が下方に位置しているのです。社会に貢献する人が上方に位置して高い能力を享受し、自分勝手な人が下方に

位置して低い能力に留まるのです。ですからこの差は平等なのです。ここには絶対的なルールが存在しているのです。

現代の日本は結果の平等を求める傾向がありますが、能力に大きな差がある現状で結果の平等を追い求めることは、かえって社会を歪めることにつながります。能力の高い人の収入が多いのは当然ではないでしょうか。

霊位の高い人、能力の高い人の収入が少ない場合、その差は積徳量の増加につながります。霊位は上昇するのです。逆に霊位の低い人、能力の低い人の収入が多い場合、その差は積徳量の減少につながります。霊位は下降するのです。ですから、過度の結果平等主義はかえって霊位の差を拡大してしまいます。能力差が拡大してしまうのです。要するに社会が歪んでしまうのです。

全ての人の人格が向上し、霊位が同レベルになって、はじめて能力の平等、結果の平等が実現するのです。我々が目指すべきはこの状態です。そのためには過度の結果平等を追求してはいけなのです。我々は平等の意味を考え直すべきです。

日本経済の回復

日本経済は1990年代以降、不景気が続いています。生命力の法則を応用することにより、景気回復は可能となります。

日本人全体の意識を、如来レベルの意識として把握することができます。そこには日本人全体としての積徳量があるのです。1986年と2001年を3月末で比較すると、この15年間で積徳量が半減していることがわかります。バブルに踊り、自己中心的な生き方を強めた結果、徳を大きく失ってしまったのです。世代交代による影響も大きいかもしれません。精神を重要視する戦前生まれの人と、重要視しない若者が入れ替わっているからです。

人の活動量は積徳量に比例しますから、日本経済の勢いは、15年前の半分近くにまで落ち込んでいるのです。ですから、現状の経済規模は大きすぎることになります。生命力の法則から考えれば、経済規模は大幅に縮小して当然、ということになります。政府も日本経済の現状をデフレと正式に認定したようですが、これは経済規模の縮小を意味しているのです。1990年代以降、景気刺激策として公共事業が続けられたのは、縮小すべき日本経済の規模を、強引に維持しようとしたためです。結果として莫大な財政赤字を抱えてしまったのです。

結局、徳を失った結果、経済規模の縮小、即ちデフレ状態を招いてしまったのですから、積徳を行なうことにより、元の経済の勢いを取り戻すことが可能となるのです。経済が成長軌道に戻れば、財政赤字も返却可能となりますから、全ての問題は解決するわけです。

では、具体的には何をすればいいのでしょうか。日本人全体の積徳量が半減したのですから、国民が平均して積徳量を2倍にすればいいのです。霊位にして0.6～0.7段程度の上昇が必要です。全国民がこの程度の霊位向上を実現すれば、日本の勢いは15年前の状態に戻ります。

日本の積徳量は1987年頃から減少に転じ、1988年～1990年の間に大幅に減少しました。その後も減少を続け、1998年前半に最低になったようです。この時以降、日本人は景気回復のために相当な努力を続けてきたため、年平均で0.3段程度の霊位上昇を実現したようです。ですから、近年の努力は決して無駄ではなかったのです。しかし、それでもまだ十分ではなのです。2001年3月末時点の積徳量は1990年頃の水準ですから、更に1986年の水準にまで高める必要があるのです。

過去3年間と同程度の努力を、更に2年間以上継続する必要があります。そうすれば、積徳量は減少前の水準にまで戻ることになります。経済を従来の成長軌道に戻すことができるのです。

最近、日本経済に対する悲観的な見方が増えているようですが、状況は着実に改善しています。ですから、悲観する必要はありません。ただ、あまりにもツケが大きすぎたのです。そのために返済に時間がかかっているのです。

2001年3月時点における積徳量の減少分を金額換算することも可能です。貨幣の価値は可変ですから、2001年の水準で考えます。すると、大体六百兆円程度になるようです。日本の国内総生産（GDP）よりも大きな金額になります。・・・あまりに莫大な金額なので、呆れてしまいます。どれほど莫大な徳を失したのでしょうか。

寄付行為は積徳行為です。ですから国民全体で600兆円程度の寄付を行なうことにより、日本経済は15年前の勢いを取り戻すことが可能になる、と考えることもできます。

政府はすでにこの方針を固めているようです。それは債権放棄というやり方です。金融機関が債権を放棄する、即ち借金を棒引きすることにより、借入先の企業を救うというやり方です。

「バブル期に借金を増やしたのは企業の責任であり、不良債権問題で社会を騒がせたのも、これらの企業である。それなのに何の責任もとらず、公的資金を使って借金が棒引きされるのではモラルが保たれない。結局バブル期に踊った方が得をしたのではないか」

という考え方が一部にあるようですが、それは「木を見て森を見ず」という発想です。これらの処理に税金が使われる場合、被害者は国民ということになります。しかし国民は会社から給料をもらって生活しているのです。その会社が債権放棄により救われるならば、結局損はしないのです。債権放棄に関係ない職業についている人の場合、放棄分の損失は寄付行為に該当するため、積徳量が増えます。国民全体の積徳量が増えることにより日本経済が勢いを取り戻せば、各企業の収益が増え、個人の収入も増えます。ですから債権放棄で一時損をするように見えますが、長い目でみれば国民全体が得をするのです。

債権放棄をしてもらう企業の関係者には社会を混乱させた責任があります。ですから積徳量は既に減少しています。責任の範囲に応じて減少しているのです。積徳量に戻すためには、何らかの形で社会に貢献しなければなりません。債権を放棄してもらっても、何も得していないのです。ですからモラルの心配は必要ありません。赦しは重要な積徳精神です。責めていても何も解決しません。

債権放棄の規模は600兆円という莫大な金額にはならないはずですが。では残りはどうすればいいのでしょうか。

規制緩和も積徳につながります。規制は一部の人間の利益を守るためにあるのです。自己利益中心的な発想から行なわれているため、過度に継続すると、徳の喪失につながります。規制緩和は広く社会全体の利益を考える立場、全体へ奉仕する立場ですから、積徳につながるのです。規制緩和推進により、日本全体の積徳量は増加することになります。

債権放棄、規制緩和でも足りない分は、人格の向上で補わなければなりません。最近の日本人は「まじめさ」「努力」といった積徳の精神を失っていると思われまます。これら人間として重要な要素を取り戻すことも、日本の勢い回復につながるのです。

政府は「IT政策」を推進しています。景気回復の起爆剤にしようというのです。確かにITは重要な政策ですが、形を整えるだけでは不十分です。勢いが必要なのです。

本当に推進すべき政策は他にあります。それは「積徳政策」です。国民全体の積徳量が増すように、あらゆる機会を通じて人格の向上を目指す政策です。この政策が推進されれば、日本人全体の生命力、勢いが増加するのです。その結果、日本経済は確実に勢いを取り戻すことができるのです。

そのためにはまず国会議員の資質を高めなければなりません。汚職議員など論外です。これらの人間の存在が大きく国益を損ねているのです。国会議員が襟を正し、国民全体が人格向上を目指す時、日本は復活するのです。努力を継続すれば、歴史上最大の発展を遂げることも可能なのです。落ち込んでいる暇はありません。実行あるのみです。解決策は他にないのです。

その際、特定の宗教を意識する必要はありません。積徳行為は全ての人を平等と見なす態度です。特定の団体を意識することは、他の人を差別することにつながり、徳を失ってしまいます。自然な気持ちで、どうすれば社会の役に立てるか考えるのです。そして、それを実行するのです。それが積徳につながるのです。

若いうちに努力しよう

我々の生活は日々与えられる生命力で規定されています。それ以上のことはできません。それ以上の活動は積徳量の減少につながり、日々供給される生命力の減少を招いてしまいます。ですから我々は適度な活動を心掛けるべきであり、生命力の過度の消費は控えるべきなのです。

霊位が向上すれば生命力の供給量が増えるのですから、必然的に活動範囲、内容が広がることになります。ですから大きく活動するためには、積徳量の増加、即ち霊位の向上が必要なのです。霊位が向上すれば、無理なく活動することが可能になります。逆に霊位が低いまま活動範囲を広げ、活動内容を高度化すると、無理が生じてしまいます。こなすことができなくなってしまうのです。ですから霊位が低下すると、仕事量が自然に減ってきます。収入も減少するのです。徳がなくなると、収入も減少するのです。これが原則なのです。

人生で成功する秘訣は、早い時期に積徳量を増やすことです。霊位が向上すれば生命力の供給量が増えるわけですから、早めに霊位を向上させれば、一生の間に供給される生命力の量が増えるわけです。豊かで幸せな人生を送ることができるのです。

若いうちに霊位の向上を心掛けることが、最善の生き方ということになります。霊位の向上は楽ではありません。しかし努力を継続すると、徐々に人生は豊かになってきます。生命力が強化されるからです。

学歴を目指せ、とっているのではありません。一般的に、霊位が高い人ほど成績優秀です。生命力豊富で、理解力が優れているためです。このように霊位の高い人は、それほど苦勞せずに学歴を獲得することができます。一流大学に現役で合格し、社会人になっても優秀な人材として活躍を続けることができます。基本的に能力が高いからです。こういう人が高い学歴を確保することは当然であり、何ら不都合はありません。

一方、霊位不十分なまま学歴を目指すとうなるでしょうか。生命力が少ないため、理解に時間がかかります。学習時間が長く必要になるのです。こういう人がどうにか学歴を確保し、社会人になると、苦勞する場合があります。学歴が一流でも、能力が二流だからです。生命力が不十分な状態では、一流の能力を発揮することができません。結果的に仕事ができないというレッテルを貼られてしまうのです。学歴があるために、かえって不幸な人生になってしまうのです。

人の能力は学歴で決まるわけではありません。霊位で決まります。積徳量が日々の生命力を規定しているのです。ですから、社会人として活躍するために必要なのは学歴ではなく、霊位なのです。学歴がなくても、霊位が高ければ高度な仕事をこなすことができます。学歴信仰は愚かです。現在の学校教育制度も、人格面を重視していない点で不十分だといえるのです。

若いうちに霊位の向上を目指し、知識は必要に応じて獲得すればいいのです。知識獲得のためには生涯学習制度が必要と思われます。ITが国策になっているのですから、教育用のホームページを用意すればいいのです。ここにあらゆる種類の学習用の教材を用意すればいいのです。社会人でもこれを見れば、必要に応じて学習することができます。

この制度の確立に必要なのは理解力の向上です。理解が遅ければ学習は進みません。そのために早期の霊位向上を目指すのです。

この体系が確立された段階で、学歴信仰は消滅するはずですが、代わりにオーラの確認がはじまるかもしれません。

プロ野球に“2年目にジンクス”という言葉があります。新人で活躍した選手が、2年目になると活躍できなくなるのです。その理由もここまで説明してきた法則で簡単に理解することができます。

新人選手はプロ野球という環境に慣れるだけで大変です。それだけでかなり生命力を使うのです。更に主力選手として活躍し、新人賞まで獲得しようものなら、積徳量は大きく減少してしまいます。生命力を消費し過ぎてしまうのです。積徳量の減少、霊位の低下です。結果として生命力の供給量が減りますから、2年目以降は一年目ほどの活躍ができなくなるのです。

1年目の活躍はほどほどに控えるべきです。それでもかなりの生命力が必要だからです。積徳量が不十分な場合、努力により積徳量を増やすべきなのです。環境に慣れれば、力を全て試合に集中することができます。ですから、ある程度プロ野球に慣れてから主力としての活躍をすればいいのです。その方が、プロ選手としてトータルの活動量、活躍度は増えるわけです。

新人選手を使い過ぎると、選手生命を縮めてしまうのです。一般的に言われていることですが、全て法則に則っているのです。

第五章 社会生活と霊位の向上

霊位の向上は社会生活にとって極めて重要です。ここでは霊位と社会生活の関連について各種の具体例を説明します。そして霊位向上の重要性について認識を深めていただきたいと思います。

成功と霊位の関係

人間は誰でも成功を望むものです。サラリーマンならば出世を望むのも当然と思われれます。この社会人としての成功と霊位には、非常に強い相関があります。

霊位とは人の本来の高さなのです。歪みの無い社会ならば、人の序列は霊位順になるのです。ですから、社会においても霊位の高い人が上位を占める傾向があります。生命力の大きい人、能力の高い人が人の上に立つということです。本来当然のことなのですが、法則として理解している人は少ないようです。残念なことです。

スポーツ選手にとっても霊位は重要です。トップクラスで活躍している選手は高い霊位を占めている場合が多いのです。菩薩界の人が多いようです。

スポーツ選手が突然スランプに陥ることがあります。肉体的な原因が無い場合、霊位の下降が原因となる場合が多いようです。人は意識で肉体をコントロールしています。霊位が高いほど圧力が高くなり、肉体をコントロールする力が強くなります。逆に霊位が下降すると圧力が低下し、肉体をコントロールする力が弱くなり、体の微妙なバランスが崩れるのです。

現代のスポーツ医学はこれらの点に盲目です。ですからスポーツ界の人々にとって、霊位を理解することは非常に重要です。

また、良い成績を残すには生命力が必要です。生命力と引換えに成果を確保しているのです。霊位の低い人はその意味でも、良い成績を残すことが困難なのです。

霊位下降の原因は簡単です。意識が下方を向いているのです。自己中心的、利益至上主義に陥っているのです。周囲に与えることを怠っているのです。徳の喪失です。スポーツマンの仕事は夢や希望を与えることです。その為には日々の努力が欠かせません。遊びすぎでは夢を与

えることはできないのです。

この場合、意識を上方に向け、積徳に励み、霊位を向上させれば、スランプは解消するものと思われまゝ。巨人の清原選手が1999年前後にスランプに陥っていたようですが、この方法により状況を改善させたものと思われまゝ。

大相撲でも同様です。霊位の高い人ほど番付が高くなっているのです。番付が高いのに勝てない力士がいる場合、大抵霊位が下降しているのです。本人の心掛けに問題があるものと思われまゝ。番付と霊位がマッチしていないのです。これでは勝てません。

番付で霊位が決まるわけではありません。霊位の高い人ほど上位へ移行していくのです。霊位は人間の生命力を意味しているのです。相撲の場合、瞬間的な気合が重要ですが、この気合の強さが、霊位に関係しているのです。霊位の高い人ほど、気合が入り、力も強くなるのです。足腰も強くなります。生命力の大きさが勝利に結びつくのです。

結局、霊位はそのまま人間の格を意味しているわけですから、それが番付に反映されるのです。

「落ち込む」という精神状態があります。何か失敗した場合、意気消沈してしまうことです。しかし見た目はそれほど変化しません。表情が曇るくらいでしょうか。ではなぜ「落ち込む」という表現を使うのでしょうか。

実は「落ち込む」とは内面意識のことを指しているのです。意気消沈すると、内面意識が下降するのです。失敗等を気にしたために起こる状態です。失敗を気にしすぎることは、下方の意識エネルギーを蓄積することです。ですから、内面意識は下降するのです。

内面意識の下降は能力の低下を意味します。ですから、気にしすぎてはいけません。反省して次に活かすという前向きな姿勢が望まれるのです。スポーツ選手の場合、内面意識の下降は成績に直結するようです。ですから、常に自分自身の精神をコントロールする必要があります。落ち込んではいけません。

霊位は積徳量によるため、簡単には変更されません。内面意識は精神状態により高さが変わるので、落ち込んでも元気を取り戻せば、内面意識は元の高さに戻ります。ただ、落ち込み続けると、霊位も低下してしまいます。下方意識の継続は、霊位の低下を招くのです。

結婚相手を選ぶ場合にも、霊位は重要です。容姿や学歴、趣味や性格、家柄等、様々な理由で相手を選択するのですが、これらは上辺の要素に過ぎません。人には格があります。そして、自分より格上の人に憧れを感じるものです。格上の相手と結婚すれば、相手の格が自分の格になるからです。徳を分け合うことも多いようです。簡単に自分の格を高めることができるのです。

もうお分かりでしょう。この格こそが霊位なのです。霊位の高い人は輝いています。人は光の強い人に憧れるのです。全ての人の意識は高次元から発生しています。ですから霊位の高い人の雰囲気は、ふるさとの雰囲気なのです。万人共通で憧れる理由はここにあるのです。

幸せな結婚をする方法として重要なのは、霊位を高めることです。霊位が低い人は、人から好かれにくいいため、結婚相手の選択の幅が狭くなりやすいのです。逆に霊位が高い場合、相手

を高めることができる為、大勢の人から好かれます。結果として、結婚相手の選択の幅は広がるのです。

人気スターと呼ばれる人々の共通項は、その霊位の高さです。高いから輝いて見えるのです。オーラを放射しています。人気の秘訣は、輝きなのです。

ですから、幸せな結婚を望む人は、霊位の向上に励むといいと思います。ヘアースタイルや化粧、ブランド品やエステ等、いくらがんばっても、トップスターの輝きを身につけることはできないのです。内面を磨かなければ、本当の輝きを得ることはできないのです。

ストレスの解消

ストレスの解消方法は人それぞれだと思います。そもそもストレスとは何なのでしょう。ストレスとは過度の下方意識です。ストレスが溜まると霊位が下降する為、生命力が弱くなります。上位次元が本来の意識の世界ですから、霊位が高い人ほど生命力に溢れているのです。ですから霊位の高い人ほど若々しい雰囲気を出しています。

中年になると、肉体が重苦しい雰囲気をしている人が増えてきます。社会的に責任の重い立場にある為、その重圧が肩に乗っているということもできます。責任も人の表面意識が作っているわけですから、下方の意識エネルギーなのです。その結果、重苦しい雰囲気の肉体になるのです。

しかし原因はそれだけではありません。人間の本質を理解していないことが、重苦しい雰囲気の最大の要因です。「人間は肉体であり霊など存在しない」と考えている人は、意識が上方を向かないのです。周囲との一体を観じることがないため、意識は常に下方を向いてしまうのです。この状態を継続することにより、霊位は徐々に下降してしまうのです。

赤ん坊や子供は皆明るい雰囲気を出しています。この年代は意識で壁を作ることをしていませんから、生命力が豊富なのです。年をとるにつれ、常識の枠組みに縛りつけられます。人を区別し、差別する習慣がついてしまうのです。また、人間は肉体であり単なる物であるという誤った思想を抱く人が多くなります。こうなると霊位は下降を続け、生命力、光は減少し、肉体は徐々に重苦しい雰囲気になってしまうのです。

科学万能思想は非常に危険です。多少学習してみればわかることですが、現代科学は物質や世界の根元については、何もわかっていないのです。分からないにもかかわらず、分かっているかのごとく、人々に知識を提供するのです。ですからこれらの知識やそれに基づく物質中心的常識を鵜呑みにしてはいけません。

科学万能思想に陥った人々は、自らの生命力を小さく見積もってしまいます。病気になると医者に行かないと治らないと思ってしまうのです。病気の人は、大抵下方の意識エネルギーの影響を強力に受けていますから、これを消滅させるだけで体調が改善する場合があります。ところがこのことを指摘する医者はほとんどいないのです。こうして人間は肉体という非常に小さな存在に貶められてしまうのです。

本来人間は、宇宙全体と一体化しうるのです。全体意識がそのレベルです。役割に応じてこ

の意識が分割することにより、個人の意識になっているわけです。ですから人間は本来自由自在なのです。しかし現代科学の妄想は、この自由自在性を奪い去ってしまうのです。

また、科学的常識は意識の重要性を無視しますから、これを信じた人々は自己中心的な想念行為を繰り返します。それが自分の権利だと錯覚してしまうのです。結果として下方の意識エネルギーが社会全体に蓄積されてしまうのです。

蓄積された下方の意識エネルギーは天界から放射される上方の意識エネルギーにより浄化されます。即ち、上下両方向の意識により、莫大なエネルギーが放射されるのです。現象として地震、台風等の災害が発生します。

浄化されない場合、不安定な社会情勢、経済破綻、戦争等が起こります。歪んだ意識が歪んだ状況を実現してしまうのです。このような状況を回避するため、浄化が行なわれるのです。

このように、下方の意識の蓄積は、社会の混乱につながるのです。ですから、我々は下方の意識、自己中心的な意識を継続してはいけません。意識を無視する科学信仰は危険なのです。

ストレスの発散は、意識を上方へ向けることが基本です。職場には下方の意識エネルギーが充満しているため、仕事はどうしてもこの影響を受けてしまいます。このエネルギーの蓄積がストレスですから、解消するためには、上方の意識エネルギーを体に取り入れればよいのです。上下両方向の意識によりエネルギーが発生し、ストレスは消滅してしまいます。

しかし、仕事でストレスを解消できる人はほとんどいません。ですから仕事が終わると霊位が下降しているのです。普通のサラリーマンの場合、日曜日に霊位は最も高くなり、金曜の夜に最も低くなるのではないのでしょうか。そして土、日にストレスを発散させ、霊位を元に戻すのです。このサイクルを繰り返しているのです。霊位は微妙に変動しているのです。

2001年2月17日に「畑山 対 リック吉村」というボクシングの世界タイトルマッチが行なわれました。格闘技戦を見る場合は、試合前に両者の霊位を確認します。霊位は技術には関係しませんが、潜在的な能力、生命力を意味しているからです。

この試合では、畑山選手の方が一段程度上でした。ですから「畑山防衛」と予想しました。可能性としてはこの方が高いのです。

しかし試合展開は意外でした。直線的に攻める畑山に対し、リックは巧みにかわしながら決定打を打たせません。リックのマイペースに対し、畑山には力みを感じられます。試合中盤で両者の内面意識を確認すると、高さが逆転しているではありませんか。リック選手が試合開始前と同様だったのに対し、畑山選手は大きく落ち込んでいます。力みやあせりといった強力な下方の意識が、彼の内面意識を下げてしまったのです。このとき「畑山選手は負ける」と思いました。

その後、畑山選手は冷静さを取り戻し、終盤盛り返すことによって、何とか引分け防衛を果たしました。奇跡といってもいいぐらいです。

このような内面意識の下降は、試合という極端な状況のために起きたものです。試合終了により下方の意識が弱まれば、ほぼ元の状態に戻るようになります。(生命力が減少しているた

め、少し下方になります)

この例からも、内面意識が状況や、精神状態で変わることがお分かりいただけたと思います。力んだり焦ったりしていけない理由は、内面意識の下降により本来の力が発揮できなくなる為です。これはスポーツや仕事だけではなく、人生全般に共通して言えることだと思います。

音楽を聴いてストレスが発散できるのは何故でしょうか。音楽には格調の高い響きが流れています。例えば2000年にレコード大賞を獲得したのは、サザンオールスターズの「TSUNAMI」でした。この曲は菩薩界三レベルが発生源です。音楽にも霊位があるのです。一般に、作曲家の作曲時の霊位が曲の霊位になるようです。ベートーベンの「運命」は菩薩界四の響きです。ベートーベン自身の霊位が菩薩界四に到達しているのです。

このように響き、格調の高い曲がヒットするのです。霊位が高い響きが好まれるということです。ヒット曲は大抵菩薩界上位の波動を放射しているのです。

これらの音楽は、その響きにより聞く人の内面意識を上方へ導きます。ストレスを受けることにより下降した内面意識が元に戻るのです。また、音楽の響きそのものに、ストレスを消去する働きがあるのです。このように音楽を聴くだけで、人は精神性を高め、ストレスを解消することができるのです。

但し、名曲がヒットするとは限りません。ヒット曲は歌手に大きな利益を与えます。利益を得るためには生命力が必要ですから、霊位が下降していると、いい曲でも売れない場合があるのです。霊位の高さ、積徳量の多さが人気歌手の必要条件なのです。

組織と霊位

社会は多数の組織から構成されています。大きな組織としては国家があり、その下には各種の企業や団体があり、小さい組織として家族があるわけです。組織といってもその状態には大きな開きがあります。勢いのある組織がある一方で、消滅してしまう組織もあります。その違いはどこにあるのでしょうか。

違いは霊位にあります。まず、中心人物の霊位が重要です。内面意識の世界では、霊位による順位が絶対です。中心人物の霊位が組織全体の霊位になるため、中心人物の霊位の高い組織が上方に位置します。高い地位を確保するのです。その結果、優先的に将来像が明示されるようです。先見性、戦略性に優れることになるのです。企業であれば、他社に先駆けて新戦略を展開することが可能となるのです。その結果として、大きな利益を上げることができるのです。

例えばマイクロソフトのビル・ゲイツ氏の場合、霊位は菩薩界4、国王レベルです。その先見性、戦略性の鋭さから、マイクロソフトが帝国化したのも当然といえるでしょう。日本のI

T政策はアメリカを見習ったものですが、そのアメリカのIT業界の中心人物はゲイツ氏だったのです。アメリカの1990年代の繁栄を支えた中心人物は、クリントン大統領とゲイツ氏なのです。

最近アメリカのIT関連企業の業績が低迷していますが、原因はマイクロソフトバッシングにあるのではないのでしょうか。マイクロソフトが独占禁止法違反訴訟で訴えられ、敗訴したことが大きいと思われます。菩薩界上位レベルになると、その勢いは自社だけには留まりません。社会全体に影響を与えることができるのです。ゲイツ氏はアメリカIT業界全体に先見性、勢い、エネルギーを与えていたのです。そのゲイツ氏を経営の中心から追いやったため、IT業界に中心がなくなったのです。勢いの源泉の消滅です。結果的にアメリカのIT業界全体が勢いを失い、利益が縮小したのです。マイクロソフト以外の企業が自分達の利益という小さな精神で訴訟を起こし、結果的に業界全体の利益を失ったのです。けちな精神が大きな損失を招いたということです。

また、中心人物の霊位はその商品の雰囲気に影響を与えます。霊位が高い場合、商品が高次元のオーラ、高級な雰囲気を醸し出します。これらの商品は人の内面意識を高めるため、持つだけでうれしく感じるのです。ですから、多くの人の購買意欲をそそるのです。

逆に、中心人物の霊位が低い会社の商品は光を放っておらず、何となくダサく感じます。つまらない商品に見えるのです。ですから売上も伸びません。このように中心人物の霊位は企業パワーとして業績に直結することになります。

このように、組織の中心人物の霊位は、組織全体に非常に大きな影響を与えます。ですから、中心人物の霊位は重要なのです。

中心人物の重要性は大きな組織に限られた話ではありません。小さな集団でも同様です。

芸能界を席卷しているグループに「SMAP」があります。出す曲が全て大ヒットし、メンバー全員が単独でドラマに主演するなど、その活躍は目覚ましいものがあります。

メンバー全員に魅力があるから人気がある、と思われているようですが、必ずしもそうではありません。一人中心になる人物がいて、その人物が他のメンバーに勢い、魅力を与えているのです。それは木村拓哉さんです。この人、若いのですが、非常に高い霊位を誇っています。力が強いので、大勢の人に勢いを分け与えることができるのです。このように、組織の中心人物は全体に大きな影響を与えているのです。

組織全体の積徳量も重要です。構成員の積徳量をすべて加算することにより、活動状態が概ね規定されてしまうのです。

例えば国家の場合、状態は千差万別です。日本の積徳量は15年前より大きく減少していますが、それでも一般の国よりも大きなプラスになっています。だからこそ経済大国と呼ばれるのです。日本より人口が多いにもかかわらず、経済規模が日本より小さい国家は、国民全体の積徳量が日本より少ないのです。社会の発展規模は積徳量で決まります。人口で決まるわけではないのです。

宗教に寛容な精神が、日本人の長所かもしれません。世界には排他的な宗教が多いのですが、

人を差別するという意味で、これらの態度は徳を失ってしまうのです。全ての人は平等なのです。

アメリカが世界一の大国の地位を維持する理由も同様です。積徳量が世界一なのです。第2次世界大戦で世界を開放したことが大きいのではないのでしょうか。ここで積徳量を大幅に増やしているようです。結果として世界中がアメリカを世界一の大国と認定しているのです。しかし、この地位が永遠に続くかどうかは不明です。精神性が低下すれば積徳量が減少し、地位も失ってしまうのです。結局、アメリカの地位を決めるのはアメリカの人々の意識なのです。徳が増えれば地位は安泰となり、徳を失えば地位も失うのです。

中には積徳量がマイナスの国家もあるようです。こういう国家は存在そのものが危うい状態に置かれてしまいます。戦乱も絶えないようです。この状態を解消するにはやはり積徳しかないのです。積徳行為は万能薬といえます。全ての不調和を解消してしまうのです。それが法則なのです。

企業も同様です。規模の大きい企業ほど、構成員の積徳量の合計値が大きくなるのです。

国内自動車メーカートップのトヨタ自動車は、積徳量でも最大の規模を誇っています。従業員一人あたり上級霊界4程度の積徳量になります。この積徳量の規模が、収益の源泉ということになります。積徳量の多い社員が増えると、企業の収益は向上します。ですから新入社員の選抜は霊位を中心に行なった方がいいということになります。霊位の存在が社会全体に認識されていないため、人の選抜基準が曖昧になっているのです。

教育問題

今年になって成人式における若者のマナーの悪さが社会問題化しました。何が起きているのでしょうか。

2001年に成人式を迎えた若者達は、1980年に誕生したわけです。この時から今までの日本社会の様相を振り返ると、彼らの言動が理解できます。

この時代は日本人が自らの精神を破壊した時代です。1980年代後半はバブル期に入り、国民全体が金まみれになりました。不動産投資や株式投資でいかに儲けるかが競われていたのです。また、各地で博覧会が次々開催され、建物の建築・撤去が繰り返され、資金が浪費されていったのです。そしてこれらが現在の不況へとつながっていったのです。この頃の日本人の精神はそれ以前に比べて明らかに下方に向かっていました。

1990年代に入ると、性の解放が叫ばれました。過度の性欲は強力な下方の意識エネルギーですから、過度に刺激してはいけません。社会全体の霊位低下につながるためです。ですから、ある程度の規制が必要なのは当然なのです。そうしないと社会は崩壊してしまうのです。しかし、1980年代後半に下落し始めた日本人の精神は、この程度の常識さえ忘れ去ってしまったのです。

この混迷の時代を常識として受け入れてきた若者の行動様式が、それ以前に育った人間に理解できないのは当然といえます。人は社会の雰囲気を受け入れながら成長します。精神崩壊と文化を履き違えていた日本人の行動様式を常識として受け入れながら育った若者を、大人が非難するのは筋違いです。教育現場は日本の社会全体であり、学校だけではありません。社会を汚したのは大人です。若者の乱れた言動行為を見れば、日本人がいかに墮落していたかがよくわかります。このことを理解し、自らの行動様式を正す人々が増えれば、社会の混迷は解消し、若者の精神・行動様式も調和してくるのです。

社会を構築しているのは我々一人一人の人間です。正しい生き方をする人が一人増えれば、それだけ社会は安定、発展するのです。他人の行動を変えるのは困難ですが、自分自身を変えることはできるのです。これを理解し、実践する人が増えるほど社会は安定するのです。その変化は子供の精神にも影響するのです。社会の安定は子供の精神の安定につながるのです。

過去は変えることができませんが、将来は変更可能です。今から日本人が精神を取り戻し、意識を向上させることにより、青少年の精神を正すことができるのです。

教育現場は学校だけではありません。社会全体、国家全体で教育しているのです。社会の構成員のすべてが教師なのです。この事実を理解し、行動することが、青少年の健全な精神育成へとつながるのです。

人格教育の確立

学校教育は知識教育に偏重しすぎているようです。知識は確かに重要です。しかし何のための知識なのか目的が不明確です。

学校教育の目的は、社会に貢献できる人を育てることです。評価項目で重要なウェイトを占めるのは教科の成績ですが、ほとんどはテストの点数ではないでしょうか。知識と社会貢献は直接的には結びついていませんから、この評価方法は教育目的に合致していないのです。

大事なのは知識を運用する人間そのものです。人格高潔ならば、知識を正しく運用し、社会発展に貢献するでしょう。逆に人格低劣な場合、言動で周囲の人々を傷つけ、知識を悪用して社会に混乱をもたらします。バブル期以降の日本を破壊したのは、後者のような知識偏重型の人間なのです。

ですから、社会に貢献するために重要な評価項目は「人格」なのです。教育の第一目標は人格、次が知識なのです。

人格が向上し、積徳量が増えれば、必然的に理解力も向上します。理解力が向上すれば、知識面での成績も向上するのです。逆に人格が向上しないままでは、理解力が乏しいため、知識面での成績も向上しないことになります。ですから、生徒の学習能力を向上させるためにも、人格教育を優先する必要があるのです。

現行教育制度では、人格と知識の優先順位を逆転させているため、成績が伸びず、人格低劣な生徒を生み出してしまうのです。その結果、学級崩壊等が起こってしまうのです。この状態

を解消するためには、人格と知識の順序を入れ替えればいいわけです。人格が向上しない場合、基本的な成績は最低ランクでいいのです。社会に貢献する能力が低いからです。

最低ランクの成績では進学困難ですから、必然的に人格も改善するのです。幼少時から人格の向上を心掛けていれば、成人式で騒ぐような人間に育つはずはありません。

1980年頃までは国民全体の意識が高かったため、人格を教育目標に掲げる必要は無かったのです。しかし、バブル期以降は国民全体の意識が大幅に下降していますから、これを目標とすることは非常に重要なのです。国民全体の霊位が、経済状況にも反映されるからです。

人格教育を確立する必要があります。知識だけで人を育てることはできません。精神を育てることが重要なのです。精神を育てる過程で知識を与えるのです。精神と知識のバランスがとれた人を育てることが、社会の発展にとって極めて重要なのです。

政治家の資質

最近大物と思える政治家を目にしなくなりました。大物政治家の資質とは何なのでしょう。

日本の首相経験者には、優秀な人が多かったようです。鳩山、岸、池田、佐藤、いずれも菩薩界四レベルの方々です。このレベルに到達すると、知識だけで物事を判断することはありません。国家の将来像、輪郭を直感的に把握することが出来るため、その方向に向けて国全体を引っ張ることができるのです。リーダーシップがとれるのです。このように菩薩界上位に到達し、国家を正しい方向に導く力のある人こそ、首相の器だといえるでしょう。

現在の日本の政治家はどうでしょうか。各政党のリーダークラスの中に、菩薩界4レベルの人は見当たりません。最近の政治家が小物になったと感じている人は多いのではないのでしょうか。理由は霊位の低下なのです。以前に比べると、年齢や肩書きが同等でも中身が未熟なのです。ですから、頼りなく感じてしまうのです。

霊位が不十分だと、知識が豊富でもそれを応用する能力が乏しいのです。新たな発想を生み出す能力に欠けるのです。創造性、先見性に難があるのです。ですから、社会が混乱している時に正しい政策を明示することができないのです。

現代の政治に希望がもてないのは、霊位低下に基づく能力の低下にその最大の要因があるわけです。

これは政治家に限ったことではありません。精神面、意識面での向上が人生の真の目的であるにもかかわらず、これを無視して社会全体が構成されているわけですから、国家全体として霊位が下降するのは当然といえるのです。霊位の低下は国家の地位低下を意味します。このままの状態が続けば、日本は大国の地位を失うかもしれません。

国民全体が精神的向上の重要性に気づき、意識の向上を目指すことが、真に国家を発展させ、世界を調和させることにつながるのです。

そのためには政治家を含め、個々の日本人が自らの精神性を高めるべく、努力する必要があります。

意識と地球環境

内面意識が高次元に到達すると、全ての存在を把握することが可能です。人だけではなく、地球全体も、太陽も、概ねその存在を捉えることができます。目で見えるように見えるわけではありませんが、雰囲気として感じるのです。

また、雰囲気の浄化も可能です。ある場所を内面に意識し、ここに高次元の光を放射することにより、雰囲気を穏やかにできるのです。

これらは一体何を意味しているのでしょうか。要するに我々の内面意識が、外部の空間につながっているのです。我々の意識が周囲の空間に影響を与えているのです。

1998年頃の日本を思い浮かべて下さい。とにかく不景気で暗い雰囲気でした。この雰囲気を作りだしているのが我々の意識なのです。暗い思いは暗い雰囲気を作り出し、社会に悪影響をあたえるのです。ですから、我々は暗い想念を発してはいけません。

地球というのは人類の意識の集積場です。ここには全ての人々の思いが渦巻いているのです。人の想念というのはこの場において、互いに影響を与えています。ですから我々は正しい想念を心掛けなければなりません。自分の想念とは、自分ひとりの問題ではないのです。地球の環境問題といっても過言ではないのです。(意識環境問題といった方がいいかもしれません)

1998年は世界的な金融危機の状態でした。日本の金融破綻が世界全体に波及し、世界経済混乱に陥り、戦争にでもなりかねないといった不安定な空気に世界全体が包まれていました。この原因は、人類全体の意識が低い方へ極端に傾いた為です。

人の意識はエネルギーです。我々の世界もエネルギーから成立しています。物理学では、物質の質量はエネルギーと等価であることを証明しています(相対性理論)。物質のエネルギーは連続しておらず、とびとびの値をとります。とびとびというのは次元の相違を意味するようです。そして次元には一定のエネルギー幅が存在しているのです。一定の幅があるため、とびとびの値になるのです。

ここに我々の世界の存続条件が内包されているのです。即ち、我々がこの世界を秩序正しく運営していく条件として、人類全体の意識エネルギーに一定の幅があるのです。即ち、上限と下限があるということです。上方は全体と一体化する意識方向。精神中心的な生き方、内面意識の方向です。一方、下方は競争、自己中心的な生き方、物質至上主義的な方向です。表面意識の方向と言うこともできます。利益至上主義的な資本主義経済もこの方向に該当します。

現在の社会状況をみる限り、存続条件の上限を超える心配は当分の間なさそうです。危険なのは下限を下回ることです。現代人の意識は極度に下方へ傾いているからです。

意識が下方へ極端に傾くと、このエネルギーを消滅させない限り、我々の世界は存続できませんから、エネルギーの極端な放射(消滅)が必要になります。これが戦争や、恐慌、地震等の社会秩序混乱の根本的な要因です。これらの不安定な状態が起こることにより、エネルギーが消滅するのです。浄化が行なわれるのです。そして社会は安定を取り戻すのです。

三宅島の噴火活動も同様の原理のようです。日本人（特に都心部の人々）の歪んだ意識エネルギーの浄化が行なわれているのです。都心部に強烈な地震を起こせば一気に浄化できるのですが、どれほどの被害になるか、想像もつきません。三宅島は東京都ですから、代わりにこの島を使って浄化を行なうことが出来るわけです。三宅島の人々は都心部の人々の犠牲になっているわけです。

ですから都や国は、これらの人々の生活保障を行なう義務があるのです。「三宅島の人是不運だ」という認識は間違いです。単に島の問題ではありません。我々は物事の根本を理解する必要があります。

とはいえ、日本全体としては、被害を最小限に食い止めることができたという点で、（三宅島の人には申し訳ないのですが）幸運だったといえるのかもしれませんが。天の恵みとさえいえるのです。

天災と呼ばれる現象を最小限に食い止めるためには、我々が自らの意識を調和させるしかないのです。そうすれば意識の歪みが少なくなり、災害が発生する理由がなくなるのです。

1998年当時も、人類全体の意識はこの下限に抵触していました。もう少し意識エネルギーが低下すれば、何らかのクラッシュが起きていたことは間違いありません。経済破綻や戦争という状況に陥っていたでしょう。

なぜなら、当時からこの原理に気づいていましたし、クラッシュしないように社会全体を、上方の意識を用いて支えていたからです。別に一人で支えていたわけではありません。社会は全ての人々で支えているのです。ただ、霊位が高くなると影響力が強くなり、支えていたと感じるのです。

社会全体の下方への意識が強すぎる場合、上方へ持ち上げるように内面意識を働かせればいいのです。そうすれば、全体としてバランスが取れるわけです。経済破綻や戦争によって下方の意識エネルギーを消去する必要はなくなるわけです。

菩薩界レベルになると、基本的に不調和な想念は発しませんから、無意識の内にも、社会を支え続けることになるのです。社会を支えるために、無意識のうちにオーラを放射するのかもしれませんが。オーラは上方の意識ですから、オーラを放射すると、下方の意識を消滅してしまうのです。上下両方向の意識により、エネルギーが放射されて、過度の下方意識エネルギーが消滅するのです。オーラを放射すると人から好かれるのは、過度の下方意識を解消するためと思われれます。下方意識を解消すると、心地よく感じるのです。

上級霊界以下の世界では、不調和な意識が存在しますから、支えられている割合が大きくなります。

結局、霊位の高い人ほど社会へ貢献しているのです。貢献した結果として霊位が向上し、更に力が強くなるのです。社会の安定、発展に寄与するほど、霊位は向上します。逆に社会を混乱させれば、霊位は下降します。

日本人は無宗教といわれますが、そろそろ真実に目覚める必要があります。精神、意識の重要性を無視して社会、人生を歩むというのは、目をつぶって道を歩み続けるようなものです。

必ずけがをしてしまうのです。

内面意識の向上を目指すことにより、社会が安定するのです。霊位の向上が社会の発展に寄与するのです。ですから、霊位の向上は現代人にとって必要不可欠なのです。

世界平和の確立

世界平和の確立は人類共通の課題ですが、意味が誤解されているようです。2001年初頭にアメリカ・イギリス軍がイラクへのミサイル攻撃を実施しました。平和を維持するためだそうです。ミサイル攻撃で本当に平和を維持できるのでしょうか。

秩序を構成するのは人々の意識です。憲法や法律があつたとしても、多くの人々がそれを無視してしまえば、秩序は維持できません。憲法や法律を守る意識そのものが、秩序の根本になるわけです。

ミサイル攻撃は多くの人々の意識に荒波をかぶせます。イラクの人々が黙っているわけがありません。強烈な非難をアメリカに浴びせるでしょう。我々の意識はエネルギーとして地球全体を覆っているのです。ですから、この非難の意識は地球全体を黒煙のように覆ってしまうのです。悪想念が人類全体を覆っている状態を、平和とは呼びません。ミサイル攻撃は世界中の人々を不幸に落とし入れるのです。

全米ミサイル防衛計画（NMD）の提案等、ブッシュ大統領になってから、世界は不穏な雰囲気になってきました。防衛目的とはいえ、武器の増加は対立意識の高揚に他なりません。対立意識は自他分離概念、自己中心的な発想であり、世界全体の意識エネルギーが下方を向いてしまいます。このエネルギーが強くなりすぎると、何らかの現象により消滅させなければならないのです。秩序とは逆の現象が起こるのです。戦争、経済壊滅、天災等、これらの現象により、このエネルギーは清算されます。そうしないと、世界が存続できないのです。

2月28日に米シアトル近郊でM6.8の大地震が起こりました。またNYダウも一四一ドル下落しました。実はこの2～3日前から、アメリカの波動（集団的な内面意識波動）が極端に乱れていることに気づいていたのです。ですから多少心配していました。するとこの報道。やはり起こったか、という感じです。

地震は天災と思われていますが、そうではありません。人々の思念の歪みは徐々に蓄積されていきます。我々の世界には意識エネルギーの下限があるため、これを超えないように歪みを必要に応じて浄化、消去する必要があります。地震や台風等がこの浄化作用なのです。莫大なエネルギーが放射されるわけです。人の思念エネルギー及び地球全体の波動が把握できるようになると、このことが感覚的にわかるのです。ですから地震や台風は、天災というより人災という方が正しいのです。

イラクへのミサイル攻撃が直接的な原因とは言い切れませんが、間接的な要因になったことは間違いありません。3月に入っても、アメリカの波動は歪んでいるのです（クリントン政権の間、歪みは感じられませんでした）。このままでは景気の大幅な後退等、避けられないと思われま

世の中は学問知識で成り立っているわけではありません。人の意識エネルギーがぶつかり合っているのです。このエネルギーを秩序正しい方向へ導くのが、指導者の役割です。平気な顔をして他国へミサイルを打ち込む人物が大国の指導者かと思うと、空恐ろしいものを感じます。

軍事力是对立感をあおるだけです。ですから常に削減する努力が必要なのです。その為には霊位の向上が必要なのです。霊位が低いままでは、人類が本来一体であるという事実を理解できません。ですから歪んだ意識エネルギーを蓄積してしまい、地震、台風、不景気等の悪しき現象につながってしまうのです。

真の平和は、意識の調和の中に存在するのです。自己中心的、利益中心的な発想からは、決して平和、調和は生まれません。我々はこのことを理解する必要があるのです。そのためには、霊位向上が欠かせないのです。ですから、日頃から意識を上方へ向ける必要があるのです。

意識浄化による秩序確立

現代社会は複雑に要因が絡み合っているため、問題が起こったときにその原因を分析するのは容易ではありません。

社会・経済は微妙なバランスで構築されています。これが少し崩れるだけで、社会全体が不安定になるのです。ですからこのバランスを保つことが、社会の安定的な運営につながるわけです。

社会全体が高度に複雑化している為、ある特定の人物や機関だけで全体のバランスを保つことは困難です。社会の調和には個人の調和が欠かせないのです。個人が本心、良心に従って生きることにより、社会全体が調和し、安定的な生活が営めるわけです。

もちろん個性をなくせ、といっているわけではありません。形式的に生きろといっているのでもありません。我欲をなくせ、といっているのです。身勝手な行為を慎む必要があるのです。下方の意識を減らし、上方の意識中心で生活することにより、社会に安定がもたらされるのです。

現代社会の混迷は、この点の認識不足が原因です。一人が不正・不調和を一つ行なえば、国全体で一億二千万もの不正が蓄積されることとなります。これでは国家は正常に機能しません。最近の日本人は国家という意識が希薄ですが、国民が一体となって社会生活を営んでいる事実には変わりはないのです。

最近の外務省問題やKSD、雪印、三菱自動車、警察不祥事・・・挙げたらきりがありません。国民全体の意識が如何に低下していたかを良く示していると思います。国の構成員の多くが社会の秩序を乱していたわけですから、国家全体のバランスが失われてきたのも当然なのです。バブルや1990年代の不毛の時代も、その原因は国民一人一人の意識の欠落です。意識の下降です。意識が下降すると秩序とは逆の状況を作り出してしまうのです。秩序とは上方の意識です。国民全体の意識が上方を向くと、物事の正邪の判断が明確に出来るため、社会全体にも調和、秩序がもたらされます。

全ての人がこの原理に気づき、意識を上方へ向ける努力、積徳行為を継続することにより、現代の不景気と呼ばれる状況も消滅させることができるのです。霊位の向上は現代社会にとって必須なのです。

霊位向上の重要性

霊位向上の重要性については、今までの説明で概ね理解していただけたのではないのでしょうか。目に見えない世界、精神世界、宗教的な分野は従来では肉体消滅後の事柄のように考えられていましたが、そうではないのです。我々の日常生活が、霊的世界に直結しているのです。内面意識の秩序が、この世界の秩序となるのです。我々は成功を望んでいますが、真の成功には内面意識の向上が欠かせないです。上辺だけの成功は根拠がありませんから、やがて消滅してしまいます。ですから我々にとって必要なことは、内面意識、霊位の向上なのです。これ抜きにして成功も発展もありえません。

21世紀に入り、社会は安定しているようですが、人々の意識は下降しています。物質的な方向、自己中心的な方向へ向かっているのです。霊位の高い人々がこれを支えているから、社会は安定を保っているわけです。

しかし皆が楽な方向、安易な方向に流れてしまえば、社会は崩壊してしまいます。本来、人は自ら立つべきであり、人にもたれかかるべきではありません。ですから、今の社会状況は異常なのです。

この状況を解消するためにも、全ての人々が意識の向上を目指さなければならないのです。社会が安定、発展するための必要条件です。霊位向上を目指す人が増えれば、社会は安定・調和します。これがルールです。ですから一人でも多くの方に霊位の向上を目指していただきたいのです。

第六章 内面意識の活動

過去数年間、内面意識を用いて様々な活動を行なってきました。霊位が向上すると、表面意識で普通の人と同様に生活しながら、内面意識で別途活動することも可能となります。

ここでは具体例を見ていただくことにより、内面意識の働きについて理解を深めていただきたいと思います。

ワールドカップアジア最終予選

1997年のワールドカップサッカーアジア最終予選はドラマチックでした。日本が奇跡的に出場権を獲得したからです。このとき一体何が起こったのでしょうか。

最終予選は、一次予選を勝ち抜いた10カ国が五カ国ずつA・Bの両ブロックに分かれるリーグ戦方式です。日本と同じBブロックに韓国が入りました。ホームとアウェーで一試合ずつ行なうため、各国とも8試合戦うこととなります。AB各ブロックの第1位のチームがワールドカップ出場を決め、各ブロックの第2位のチーム同士で第3代表決定戦を行ないます。勝ち点（勝利3、引分け1、敗戦0）の争いですから、引分けよりも勝利を重ねるほうが有利です。

初戦のウズベキスタン戦は6対3で勝利。カズの4得点で大勝したものの、後半に3点取られる等、満足のいく内容ではありません。2戦目のUAE戦はアウェーで0対0の引分け、アウェーとはいえ、勝ち点3を稼いだかったところであり、まだ本調子ではありません。そして第3戦はホームの韓国戦、序盤戦の山場です。前半は0対0。後半22分に山口選手のループシュートで先制。ところがこの後、日本は守備固めに入ったため、韓国に押されます。後半39分と42分に立て続けに点を奪われ、終わってみれば1対2の逆転負け、試合終了直前に逆転されるという最悪の負け方でした。

続いてはカザフスタン、ウズベキスタンとアウェーの連戦、中央アジアへの遠征です。

まず最初の相手はカザフスタン。1対0と有利な試合展開だったにもかかわらず、試合終了直前に同点ゴールを奪われ、試合終了。1対1の引分けで、勝ち点3を逃したのです。しかも韓国戦に続いて試合終了直前に失点したため、チーム全体が非常にいやなムードに包まれてしまいました。

短期決戦においては、チームの勢いが非常に重要です。日本代表は試合終盤の失点を繰り返したことにより、この勢いを失ってしまったのです。流れを変えるために、サッカー協会は加茂監督の解任、及び岡田コーチの監督就任を決定しました。

岡田監督の初戦の相手はウズベキスタン。第1ラウンドで6対3と大勝している相手であり、楽な相手かと思われました。しかし試合中盤で1点リードされてしまい、追いつけないまま試合の終盤を迎えます。これまでに韓国戦で負けており、ウズベキスタンにまで敗れば、予選通過は絶望的になります。ところが不思議なことが起こりました。井原選手のゴール前のパスをだれも触れることなく、ゴールに吸い込まれてしまったのです。結局1対1の引分け。ここ

で一体何が起こったのでしょうか。

実は、この試合の後半から、私の内面意識が活動を開始したのです。この頃、日中は会社、その他は宗教家といった感じの生活を送っていました。当時の霊位は菩薩界3上位。格が高くなっていることを自覚していたので、社会に悪影響与えないよう「勝負事には関与しない」をモットーにしていました。

ところが、テレビで試合を見ていると、内面意識が勝手に日本チームの指導に行こうとするのです。内面意識が日本代表チームに力を与えようとするのです。

「何が何でも勝つ、勝たなければならない」という選手、監督やサッカーファンの強い願いに私の内面意識が感応したようなのです。「日本全体を勇気づける」という目的もあったようです。代表チームの中途半端な戦い方が、日本全体を暗いムードに包んでいたからでしょう。

尚、内面意識と表面意識では能力が全く異なります。最大の違いは情報量の相違です。内面意識は霊界全体の情報を把握しているようなのですが、私の表面意識はその百万分の一も持ち合わせていません。ですから判断力に雲泥の差があるのです。

ですから私が自分の表面意識で何かを操作するわけではないのです。高度に発達した内面意識が、高次元の立場で働くのです。

仕方なく、胸に力を入れて、内面意識を競技場に飛ばしました。内面意識がチームの指導を開始したのです。距離という概念は意識が生み出しているようです。本来、全空間は我々に内包されています。ですから、内面意識はどこへでも送ることが可能なのです。内面意識は全体につながるのです。

このときから日本代表チームの戦力は向上を始めたのでした。チームの生命力、光が大きくなったためです。サッカーのような組織プレー主体の競技では、選手や監督の内面意識が一体化して活動するようです。その生命力の大きさが、チームとしての生命力、エネルギーとなるわけです。ですから、霊位の高い選手が多いチームは迫力や勢いが増すことになり、勝つ可能性が高くなるのです。

プロサッカーの場合、チーム全体のエネルギーは菩薩界3～如来界1程度の生命力と同レベルになるようです。一人分の生命力を菩薩界1とすると、7人分～120人分程度の生命力の衝突となるわけです（2.6の二乗、5乗を計算しただけです）。エネルギー規模は、試合の大きさによって変わるようです。大きな大会ほどレベルの高い選手、霊位の高い選手が多くなり、チームのエネルギーは大きくなります。また、サポーターの声援もチームのエネルギーに加算されます。一般にアウェーよりホームほうが戦いやすいのは、ホームチームへの応援が生命力、エネルギーの向上となり、戦力がアップするためです（アウェーチームは戦力がダウンします）。

日本代表チームの生命力に私の生命力が加わることにより、エネルギーは倍加したようです。その結果、後半は日本がウズベキスタンに対し、攻勢を続けることができたのです。そして、

試合終了直前のラッキーといえる得点により、チーム全体が活気づきました。勝利こそできなかったものの、それに匹敵するくらい大きな影響を日本代表チーム全体に与えることができたのです。

一般の人の応援もチームのエネルギーアップに貢献します。ただ、1人当たりの生命力が小さいため、小さな影響しか与えることができません。サポーターやテレビ観戦している人々全員のエネルギーでも、私1人分よりかなり小さかったようです。

また、応援の方法が間違っているようです。我々は表面意識では分離しています。ですから選手の見える方向に声援を送っても、声以外何も届かないのです。本当に力を与えたいければ、自分の内面に選手を映し、そこに生命力を送らなければなりません。内面意識が全体へつながる方向だからです。そうすれば自分の生命力を選手に与えることができるのです。

但し、これは自分の生命力を消耗する行為ですから、継続すると極端に生命力が減少します。霊位が下降してしまうのです。私の場合、イラン戦まで関与を続けたのですが、試合毎に霊位が0.1程度程度下降したようです。霊位が高かっただけに、莫大な生命力を消耗していたことになります。まさに命がけで日本代表を支えていたのです。ですから普通の人はやらない方がいいかもしれません。それでも構わなければ、真剣に応援するのもいいでしょう。

続く試合は国立でのUAE戦。残り3試合のこの段階では韓国の予選1位通過はほぼ確実であり、2位UAE、3位が勝ち点一の差で日本でした。絶対に負けられない一戦です。生命力増加の影響から、チームのリズムは徐々によくなっていきました。結果は1対1の引分けでしたが、この試合から、多くの選手が復活の手ごたえを感じたようです。

続いてアウェーでの韓国戦。残り2試合でUAEに勝ち点1の差で負けている日本にとって、絶対に負けられない一戦です。私の内面意識は、前の2試合では力を貸しているだけという感じでしたが、韓国戦からは方法を変えました。大きな生命力により、全選手の動きをコントロールし始めたのです。霊位が高いので、指導力も強いのです。この試合以降、日本チームの組織力は向上したのです。

サッカーの理念は格闘技に通じるようです。高度に複雑化した格闘技、といった感じです。「攻守一体型が最強」

と感じました。守っているときに攻め、攻めているときに守るのです。守備に回っている時には、ボールを奪った際の攻撃のパターンを常に考えながら動き、攻撃している時には、ボールを奪われた際の守備パターンを常に考えながら動くのです。一瞬の気の緩みも許されない戦い方です。格闘技と同じ考え方です。

この原則を用いてチームを導いたようです。選手全員でこの原則を実現するのです。組織力の重視です。個人技で見劣りする日本にはベターな方法でした。

人には得手、不得手があります。私の内面意識は格闘技が得意なようです。格闘技は学校でやった柔道以外には経験がないのですが、精神的なトレーニングを開始してから、体を拳法の型のように動かすことができるようになりました。体が自然に動くのです（何の型かはわかり

ません)。

内面意識には格闘技の経験があるようです。ですからサッカーの指導も困難ではなかったのです。

この韓国戦は最終予選8試合中のベストマッチでした。試合開始三分で先制した日本はさらに得点を重ね、前半で2対0。後半韓国の猛反撃を受けますが、それも退場者を出す後半30分過ぎまでであり、後は余裕をもって逃げ切り。多くの人々の予想を覆し、予選2勝目を強敵韓国から上げたのでした。

最終戦の相手はカザフスタン。アウェーで1対1と引き分けた相手だったにもかかわらず、国立では日本が攻守にわたり圧倒、5対1の圧勝でリーグ2位を確保し、第3代表決定戦への進出を決めました。

第3代表決定戦の相手はイラン、Aブロックの最有力候補だった強豪です。この試合では、日本の方がイランよりも若干霊位が上だったようですが、大差ありません。この差の反映でしょうか、試合は壮絶でした。結果は延長Vゴールで日本が3対2と辛くも勝利を収め、フランス大会への切符を手にする事ができたのです。

チーム全体の霊位(生命力、光の量)により、チームの活動エネルギーは規定されます。国際レベルの試合では技術的には大差ありませんから、チームの霊位を確認するだけで、強さの見当をつけることができます。実際、試合結果もそのようになる場合が多いのです。

今回のリーグ戦においてチームの霊位を見ると、最上位は韓国、次に日本とUAEがほぼ同レベル、少し下がってカザフスタン、ウズベキスタンがほぼ同レベルです。韓国が他を引き離しているため、1位になったのは順当な結果だといえます。

但し、これはリーグ戦開始直後のことであり、途中で変更が起こっているのです。加茂監督の解任です。加茂監督はチーム全体に大きな生命力を与えていたのです。加茂監督の解任により、日本チームから生命力が失われてしまいました。その結果、アウェーのウズベキスタン戦で先制を許してしまったのです。

岡田監督が穴埋めしたと思われているようですが、そうではありません。岡田さんは当初から日本チームに参加しているのですから、監督に昇格しても生命力は増加しません。この試合の後半から偶然にも私が生命力を送ったため、事なきを得たのです。それがなければ、加茂監督解任後の日本は連敗していたかもしれないのです。

ですから、監督はチーム内での昇格ではなく交代という形にしなければなりません。霊位の高い人物、生命力の大きな人物を新たに監督に招くのです。そうすればチーム全体の生命力が大きくなるため、勝利の確率が高くなるのです。生命力の存在を知らないことは、非常に危険です。知っていればこのような愚かな解任劇はなかったはずで。

名監督には霊位の高い人物が多いのです。イタリアセリエAの強豪、ASローマのカペッロ監督や巨人の長嶋監督など、いずれも菩薩界3レベルに位置しています。大きな生命力が高い勝率の源泉なのです。

ワールドカップフランス大会

ワールドカップ本戦で、日本は予選リーグでアルゼンチン、クロアチア、ジャマイカと同組でした。結果は3戦全敗。初勝利は次回のワールドカップへ持ち越しとなりました。

この四チームの霊位を見ると、アルゼンチンがトップ、続いて日本とクロアチアがほぼ同レベル、ジャマイカが最後になります。

戦前の予想で、日本はジャマイカには勝てると言われていましたが、霊位だけ見るとあながち的はずれでないことがわかります。では何故日本は1勝もできなかったのでしょうか。

日本チームはアルゼンチン、クロアチア両国に惜敗し、予選突破は不可能となったため、最後のジャマカ戦は悪く言えば消化試合でした。

実は試合当日の仕事で、イライラ感が強くなってきた時に、ふと思いました。

「サッカーの応援をしても何の得にもならないし、礼を言ってもらえるわけでもない。今日はやめるか」

この大会でも、予選同様に日本チームに光を送っていたのです。予選時よりも霊位が向上していましたから、影響力はかなりのものでした。しかし日本が2連敗したので、私の気力も萎えていたのです。

しかし、試合直前になるとやはり応援したいような気分にもなります。中途半端だったので。試合開始直後は光を送っていましたが、前半11分過ぎには停止してしまいました。表面意識では何もしていないのですが、内面意識が手を引いたのです。

この頃から徐々に日本チームのスピードが落ちてしまい、ジャマイカに得点を許します。0対2とリードされ、さすがに「やばい」と思ったので、内面意識に再び指導を依頼しました。そのため、後半14分過ぎに再び日本チームに光が送られたのです。この時からスピード感、気迫が戻り、徐々に攻撃のリズムが生まれ、記念すべきワールドカップ初得点へと結びついたので。

日本のサッカーは強くなったと思われていますが、この大会時には霊位が不十分だったので。器が小さいというか、人間的にやや未熟だったので。結果として圧力、気迫で圧倒されてしまい、勝負に負けてしまうのです。選手の実力で戦っていたのは、ジャマイカ戦の前半十一分から後半十四分までの間だけだったので。後は私が生命力、気力を補っていましたから、実力とはいえないのです。

しかし悲観する必要はありません。生命力の増加によりチームが強くなることを確認できたわけですから、強化方針も明確になったのです。即ち、霊位の向上です。徳を積み、人間的に成長して器の大きな人間になればいいのです。生命力が豊富になりますから、気合負けすることがなくなり、勝負運も強くなるわけです。技術は従来通り高めればいいのです。ただ、サッカーの練習だけでは足りないということです。社会全体を大切に思う気持ちを強くしなければなりません。そうすれば、日本のサッカーが世界のトップに君臨することも、決して夢ではないのです。

視聴率と霊位

最近、テレビの視聴率は下がり気味だそうです。BSや有線テレビ等、チャンネル数が増え、選択の幅が広がったのですから、当然のことともいえるでしょう。しかし、それなりに視聴率を稼いでいる番組もあるのです。何が原因なのでしょう。

視聴率を稼ぐ番組というのは、端的に言って面白い番組です。理屈抜きに面白いのです。楽しいのです。では、何が楽しいと感じるのでしょうか。我々視聴者の心です。では心とは何なのでしょう。これが分からないと理由は解明できません。

心とは我々の意識です。表面意識と内面意識がありますが、無意識に惹かれている場合、働いているのは内面意識の方が主体です。内面意識は常に向上を目指しています。霊位の高い世界に惹かれるのです。ですから霊位の高い雰囲気、即ち高次元の波動に惹かれるのです。明るい波動に魅力を感じるのです。

実際の番組では、どのような波動が放射されているのでしょうか。視聴者に影響を与えるのは、番組の中心人物の雰囲気、オーラです。番組に参与している人の波動が、そのまま番組の波動になっています。

具体的に見てみましょう。平日の午後十時台といえば、NHKとテレビ朝日がニュース番組で視聴率を争っています。テレビ朝日の「ニュースステーション」から放射される光、オーラは菩薩界2レベル、久米宏さんの光です。番組の中心人物は久米宏さんですから、その内面意識が番組全体を支えているのです。一方、NHKの「ニュース10」からは明確な光の放射を感じません。両番組には明らかに雰囲気の差が生じています。

この差は誰でもはっきり感じるができると思います。「ニュースステーション」の方が明るく、楽しく感じるのです。両者の視聴率競争の軍配は「ニュースステーション」に上がっています。雰囲気、オーラの差を反映して大差になっているようです。

テレビは見ることだけが目的ではありません。BGMのような役割としても重要です。一人暮らしの人が多い世の中では、孤独を紛らわすためにも、テレビが必要なのです。孤独を感じると、人の心は塞ぎます。意識が下方を向いてしまうのです。ですから楽しくありません。ここで必要となるのは意識を向上させる明るさ、光です。ですから、視聴者は波動の高い番組を選ぶのです。その方が、精神を向上させる効果が高いからです。テレビから放射される光、オーラには、内面意識を向上させる働きがあるのです。高次元から放射される光が、オーラだからです。

高視聴率番組があると、要因分析をマスコミで行なうようですが、どうも内容がずれているようです。人の心は波動に動かされているのです。テレビは波動放射体なのです。ですから波動により視聴率が変化するのは当然なのです。極論すれば、全ての存在は波動なのです。

2000年の高視聴率番組のベストテンを見てみましょう。紅白歌合戦、シドニーオリンピック、プロ野球日本シリーズ、木村拓哉主演ドラマ「ビューティフルライフ」、松嶋菜々子主演ドラマ、の5種類に分類することができます。

これら各番組の霊位は「ビューティフルライフ」が菩薩界3上位で、他は菩薩界5及び如来レベルの波動です。見ているだけで気分が高揚してくるのです。だから、高視聴率を取れるのです。

菩薩界レベルの光を放射していない番組も多いようです。ですから光を放射している番組や、その中でも特に強い光の番組は、高視聴率を確保することができるのです。

2000年10～12月期のドラマで視聴率トップを争っていたのは「やまとなでしこ」と「オヤジい」でした。この両番組の波動は共に如来レベルです。

2001年1～3月期のドラマでは木村拓哉主演の「HERO」が11話全てで30%を超える視聴率を獲得しました。圧倒的な強さです。実はこの番組の波動は第三話の途中から変更になっています。1、2話は菩薩界3上位レベルですが、第4話以降が如来界レベルに変更になっています。第五話以降、視聴率が35%前後で安定したのも、この波動変更の影響と思われる。

ここで私の内面意識が関与していたのです。菩薩界5や如来界レベルの光を放射できる人は、現在ではほとんどいないようです。私の内面意識が何らかの形で関与した番組から、オーラが放射されていたということです。オーラを放射すると視聴率が向上するのです。そういう法則があるのです。気分が高揚し、盛り上がるためです。番組をみているだけで楽しくなるのです。この感覚は万人共通で、年齢や性別は関係ありません。ですから、幅広い層に受け入れられているのです。万人共通である内面意識のふるさとの雰囲気、番組が放射しているからです。

テレビ番組にとって重要な要素の一つは、高い波動、強い光、オーラを放射することです。その為には、番組の中心人物に霊位の高い人物を起用することが重要です。

人気映画俳優も同様の原理によります。霊位の高い人が主演すると、スクリーン全体から強いオーラが放射されるのです。高倉健や絶頂期のシルベスタ・スタローン等、スターと呼ばれる人達は皆霊位が高く、オーラの強い人なのです。こういう人が主演すると、ストーリーに関係なく、見ていて楽しくなるのです。(もちろんストーリーも重要でしょうが)

逆に霊位が下がると、同じ人が主演していても、以前ほど楽しい感じがしなくなります。オーラが弱くなるからです。こうなると徐々に人気は低下します。結果的に仕事が減り、収入も減るのです。霊位の低下は活動規模の縮小を招き、収入の減少を招くのです。日本経済と同じ状況です。

現代の日本では、宗教を非常識と見なすことがエリートの条件のように考えられていますが、この態度が日本人全体の霊位を下げているのです。結果として魅力的な俳優、スターが減少し、視聴率低迷や観客動員数の減少を招いているのです。プロ野球選手に個性的な選手が減ったのも、不景気も、全て同じ理由によるのです。

仏教の改革

オウム真理教に対峙した為、殺害された坂本弁護士一家。1995年10月22日に横浜アリーナにおいて、日弁連、関弁連、横浜弁護士会の共催で坂本さん一家の合同葬儀が行なわれました。高僧と思われる人物が式を行なっている様子（ビデオ）がテレビのニュース番組で報道されていたのです。

この時、フッと疑問が沸き起こりました。

「本当に坂本さんは救われているのかな」

と思ったのです。この頃、私の霊位は菩薩界2上位。祈りや精神統一、浄霊を繰り返すことにより到達した霊位でした。ですから、浄霊には大して時間がかからなくなっていました。

確認方法は、内面意識を坂本さんの方に向けるだけです。そうすると、対象者の波動を感じるのです。光が強く感じるほど、高い霊界に移行しています。逆に迷っている場合、暗い世界に沈んでいるように感じます。

坂本さんの場合、深い暗闇に沈んでいる感じでした。「何やってんだ」と僧侶に対する非難の思いが湧いてきましたが、とりあえず坂本さんの浄霊に取り掛かりました。浄霊のやり方は、特に形式が定まっているわけではありません（人によって違うと思います）。私は、胸の中に対象者を導き入れ（内面意識で引き上げます）高次元の光を浴びせます。菩薩界2レベルでは光がそれほど強くない為、さらに上位の光を胸に引きます。「ありがとうございます」と祈るだけで、さらに高次元の光を引くことができるのです。

坂本さんの場合もこの方法で浄霊しました。続いて奥さん、お子さんと、短時間（1～2分）で完全に浄化し終わりました。元々人格高潔な方々ですから、3人共高い霊界へ移行しているようです。

問題は葬儀です。結局、僧侶は何もしていなかったのです。儀式を行なったことにより、関係者が「葬儀を行なった」と満足できたことだけが唯一の救いです。

救済能力が無いならば、葬式など行なうべきではありませんし、ましてや金銭など受け取ってははいけません。積徳量の減少につながり、霊位が下降してしまいます。積徳量を増やし、霊位が向上すれば救済能力が高まり、浄霊も可能となります。そのレベルに達してから、葬式を扱うべきです。このレベルに達していない僧侶の葬式は、詐欺行為に近いのではないのでしょうか。

一般の人々も僧侶の能力を信じていないため、霊的な常識が世間に広まらないのです。ですから、知識人として社会に認知されている人々の中に、宗教家が名を連ねることがないのです。社会に認められていないのです。中途半端な宗教家の存在が、社会の霊的認識を歪めているのです。

仏教は内面意識へ傾きすぎているのではないのでしょうか。我々の世界には表面意識と内面意識の両意識が必要です。両意識の交点がこの世界です。両意識のバランスがとれて、はじめて社会は安定的に機能するのです。

悟りとは、内面意識の発生源である高次元に到達することです。そのためには表面意識を弱め、自己主張を控える態度は確かに必要です。しかしそれだけでは不十分です。高次元に到達するためには、徳を積まなければなりません。そのためには社会に貢献する必要があるのです。社会に貢献しなければ生命力は大きくなりませんから、高次元には到達できません。ですから悟りには労働が必要なのです。

靈的認識力が不完全な状態での葬式では、積徳になりません。檀家から寄付を受けることは、徳を減らす行為です。ますます靈位が下降し、悟りから遠のいてしまいます。能力不十分な僧侶は、他の働きを積極的に行なうべきです。そうしなければ、いつまでたっても本当の悟りを得ることはできません。

社会全体が表面意識、下方意識に傾いている現状では、バランスを保つために、内面意識に傾いている（と思われている）僧侶の存在が認められるのかもしれませんが。しかし一般の人々の靈位が向上すれば、これらの人々の存在は無用となります。その時に必要とされるのは、社会全体を導く力、真の悟りの境地です。そのためには積徳が欠かせません。現代仏教には改革が必要だと思われます。

英国人女性殺害事件

ルーシー・ブラックマンさんの失踪 ～ バラバラ遺体発見の事件は、日本、イギリス双方に暗い影を落としました。実はこの事件に少し関わったため、内容について説明したいと思います。

確か遺体発見の2～3日前の明け方、目がさめる1時間程前だったでしょうか。ぼんやりしている時に、ルーシーさんの姿が思い浮かんできたのです。苦しんでいるように感じました。「浄化されていないな」

と思い、早速光を送り始めました。10～20秒程度でルーシーさんは輝きを取り戻しました。自由自在になったのです。

「天界を目指してください」

と伝えて、彼女を送りだしました。目がさめる直前の時間というのは靈感が強く働くため、このような現象が起こり易いのです。この時、彼女が亡くなっていることを確信したのです。

驚いたのはその2～3日後です。

「ルーシー・ブラックマンさんと思われる遺体が発見されました」

とテレビで報道しているではありませんか。警察が2000年7月のルーシーさん失踪以来、7ヶ月間発見できなかった遺体を、織原容疑者所有マンションから200メートル足らずの場所から発見できたのは、偶然ではなかったのです。

「彼女が導いたのだな」

と、直感しました。彼女は浄霊の結果、上位の靈界入りを果たしたのです。救われていたのです。浄霊前は自由に動くことはできなかったようですが、浄化後は自由になったため、自ら

解決に向けて動き出したのです。

浄霊により、誰でも上位の霊界に入れるわけではありません。霊位は積徳量によります。マイナスが多い場合、上位の霊界に導くことはできないのです。彼女の場合、生前は性格良好だったのでしょう。上位の世界に導くことができたのです。

指導霊等の意識が我々に関与する場合、インスピレーションにより導くことがよくあります。捜査官を導く場合、本人の脳に直接指示を与え、「こっちに何かありそうだな」と思わせるわけです。それまで疑問に思わなかった場所、配置でも「何かおかしくないか」と感じさせるわけです。そしてその場所を捜査官が調査して、遺体発見となるわけです。

別に作り話ではありません。現に捜査はこのように進んだようです。遺体発見はルーシーさん自身の働きかけによるのです。

彼女は死後、彼の所業を全て見ていたようなのです。遺体が切り裂かれて、埋められる場面も、全て目撃していたようなのです。ただ、力不足で捜査官等、周囲の人々に影響を与えることができなかつたようです。浄化後、力が強くなった結果、捜査官を導くことができるようになったのです。

尚、犯人が織原氏であるのは間違いないようです。

「犯人は織原です」

と彼女自身が私に伝えてきています。彼女も正確な判断力を身につけていますから、むやみやたらに人を責めることはしません。犯罪を自供さえすれば、全てを許すと言っています。しかし、彼が「自分はやっていない」と嘘をついているため、許すわけにはいかないようです。「このまま放っておいては、社会の秩序が保てない、だから織原をこのまま許すわけにはいかない」

と彼女は言っています。

人は死んで終わりではありません。意識は明確に残っています。ですから、殺人等の犯罪は、決して許されないのです。この事実を認識できないことが、戦争等の更なる犯罪の温床になっているのです。

我々は自分自身について、理解を深める必要があります。自分自身が意識であること。本来全ての人々は一体であること。人の価値に差はないこと。肉体の死は意識の次元の移転にすぎないこと。意識は死後も継続すること。これらの常識が世間の常識になっていないため、各種の不調和が発生してくるのです。

霊位が極端に下降した結果、自分自身が何者かわからなくなっているのです。積徳行為を続けることにより、霊位を向上させればよいのです。霊位の向上は本質の把握力を高めます。そうすれば、これらの内容が常識であることが、感覚的に理解できるようになるのです。霊位向上により、社会秩序を確立することが可能になるのです。

オーラ停止

特に1997年後半以降、内面意識を用いて様々な活動を行なってきました。日本全体に生命力、光が不足していたからです。また、国民全体の霊位が低下したため、先見性、戦略性が日本全体から失われていました。経済復興のためにも導く必要があったのです。

しかし、その必要も無くなったようです。本書の出版により、多くの人がオーラの原理やその応用方法を理解するからです。私がいままで放射していた光を、今後は読者の方々が放射できるようになるからです。

今まではオーラの原理に気がついている人がほとんどいなかったため、一部の人間が大勢の分を肩代わりしなければならなかったのです。しかし、その状況も本書の出版により変わるわけです。

2001年の3月までに、光の放射は全て停止しました。今後は自分の生命力を各種研究等の自分自身の活動に集中させるつもりです。

第7章 積徳の法則

ここでは日常生活における生活態度を中心とした、霊位向上の方法についてまとめてみました。

霊位向上は積徳量の増加により達成できます。積徳にはどのような生活態度が望まれるのでしょうか。以下、簡単にまとめてみました。

法則1 与えること

人に何か与えると、損をしたと錯覚する人がいるかもしれませんが、それは誤解です。この世界と徳の世界は逆の関係になっています。人に必要な物や金銭を与えると、代わりに生命力があたえられます。この行為を繰り返すことにより、積徳量が増えるのです。

但し、与えすぎは禁物です。相手が墮落してしまいます。適度に与えることが必要です。

法則2 働くこと

労働、物、金銭、これらは全て同じ価値を有しています。従って、物を与えることと労働を与えることは同義です。尚、社会を乱す行為を労働とは呼びません。労働により社会に貢献した分、生命力が還元されます。この生命力は更に給与に還元されるわけですが、労働量に比べて給与が少ない場合、差は自分に残ります。積徳量が増えるのです。天の計算は完璧ですから、働きすぎて損をするということはありません。

法則3 慈善活動

慈善活動は働いて、与えることです。法則1、2の応用です。ですからこの活動により、積徳量が増えることになります。

法則4 調和した言葉や思い

調和した言葉や思いは社会を調和、安定へと導きます。社会に良い影響を与えるのです。社会に良い影響を与えれば、霊位は向上します。言葉や思いを整えるのは、簡単なようで実は大変です。しかし努力すれば徐々に改善されます。改善されるにつれて霊位は向上しているのです。

法則5 努力すること

日々与えられる生命力の量は、積徳量に比例するだけではありません。努力する姿勢が認められと、より多くの生命力が与えられるようです。社会の発展のために努力する人にはより多くのエネルギーが与えられるのです。その姿勢の継続が、早期の積徳量増加につながります。努力は天に通じるのです。

法則6 倫理感の尊重

当然のことです。

法則7 休暇の取得

消極的な方法かもしれませんが、休暇の取得も重要です。休暇中も生命力の供給は続きます。しかし積極的な生産活動を行なう必要がないため、生命力の消費は少なくて済みます。供給量と消費量の差が蓄積されることになり、生命力が増加するのです。

法則8 上方の意識の継続

「上方の意識」については、第三章を参照して下さい。

徳を減らす生活態度についてもまとめました。以下に禁止事項として記述します。

禁止1 奪うこと

泥棒等の犯罪行為は、その罪の分だけ積徳量が消滅します。積徳量がゼロの場合、これがマ

マイナスになってしまいます。借金をしているような状態になるのです。このマイナス分は必ず償わなければなりません。苦しい将来が待っているのです。ですから、犯罪行為がいけないのは当然なのです。

奪うとは、犯罪行為ではありません。人の手柄を自分の手柄にしたりすると、徳が減少してしまいます。また、労働量に比べて給料が多い場合、差の分が積徳量から減少してしまいます。この状態が継続すると、能力が低下してしまいます。従って、もらいすぎは禁物です。「けち」も奪うことと同様です。与えるべきものを与えないことは、相手のもらうべきものを奪っていることと同じです。

禁止 2 結果を求めすぎること（欲）

地位や資格、成績等の結果を求めすぎると、生命力の過度の消費につながります。生命力が減少し、能力が低下してしまうのです。後の活動の障害となるのです。ですから食欲は禁物です。

必要な生命力は常に与えられていますから、その範囲内での活動を心掛けるべきです。さらに積徳行為を行えば、生命力の供給量が増え、能力が向上します。このような生活態度が望まれるのです。

禁止 3 目立ちすぎ

人から賞賛を受けることは生命力の減少につながります。賞賛を受ける行為は積徳行為ですから、生命力が供給されています。ですから多少賞賛されても、トータルで生命力が減少することはありません。しかし賞賛されすぎると、生命力が減少してしまいます。

また、出過ぎる態度は、他の人の機会を奪うという点からも、徳の減少につながるのです。このように目立ちすぎる行為は積徳量の減少から能力低下につながり、後の活動に支障が出ることになります。よって露出しすぎないように、目立ちすぎないように、我々は常日頃から心掛ける必要があります。

禁止 4 怠慢

怠慢は生命力の供給量の減少を招き、霊位の低下につながります。法則五と逆の現象が起こるのです。努力すれば生命力の供給が増えますが、怠慢は逆にこれを減らしてしまうのです。ですから、我々は常に努力を怠ってはならないのです。

禁止 5 乱れた言葉や思い

乱れた言葉や思いは社会全体に悪影響を及ぼします。社会に悪影響を与えることと霊位の低下は同義です。ですから、言葉や思いを管理しなければなりません。

禁止6 倫理感の欠如

説明無用でしょう。政界では反省の意味で「倫理」という言葉が繰り返されていますが、この愚かさが国家全体に不利益をもたらしているのです。

禁止7 下方の意識の継続

「下方の意識」については第三章を参照して下さい。

積徳の効果について、まとめてみました。

効果1 能力の向上

人間の活動は生命力の消費により行なわれています。消費は人間の生命力、理解力、創造力、企画力、気力、各種の成績や人々の賞賛、それによる自身の喜び等、あらゆる分野に及んでいます。要するに、人間の能力は生命力の量により規定されているのです。

日々の活動力として与えられる生命力は、その人の積徳量、生命力に比例します。ですから、徳を積むことにより、日々供給される生命力が増加するのです。これは能力の向上を意味します。従って、最高の自己研鑽方法は、徳を積むことです。徳を積むことにより、あらゆる能力がアップするのです。

効果2 豊かさの享受

積徳量が増えると、供給される生命力の量が増加するため、必然的に生活が豊かになります。生活状態は日々与えられる生命力の量で決まるからです。本当の豊かさを享受するためには、積徳が欠かせないのです。

芸能人やスポーツマン等、華やかな世界で生きる人々は、常に高度な能力を発揮し、人々から賞賛されているため、消費する生命力の量は莫大です。それでも生命力が減少しないのは、日々与えられる生命力の量が常人よりはるかに多いからです。生命力の大きい人ほど、与えられる生命力も多いのです。結果的に大きな活動、活躍ができるわけです。

自分の得た光、生命力は人に与えることも可能です。即ち、霊位の向上は周囲の人々の幸せにも結びつくのです。幸せになる近道は、自身を高めること、即ち積徳に励むことなのです。

効果3 社会の調和、安定、発展

社会は個人の集合体です。個人が豊かになることと、社会が豊かになることは同じことです。

積徳は個人の調和、安定、発展に結びつきます。これはそのまま社会の発展にもつながるので
す。景気も回復します。

第八章 意識の向上

太陽の効果

晴天の日ほど気分のいいものはありません。太陽の光は我々の精神を向上させるエネルギーとして非常に重要なことが分かります。物理的には核融合反応によるエネルギーの放射としか思われていませんが、これは誤っているのではないのでしょうか。

精神統一により内面意識の上昇を続けると、太陽に直結する場合があります。そうすると自分自身が太陽になった感じになります。太陽は、如来レベルの意識なのです。エネルギーは如来界35段程度のようなのです。巨大な光の塊なのです。我々の身近にある、最も格の高い神霊は太陽だったということです。

太陽なくして人類は存続できません。太陽は人類の生命の根元なのです。従来は物理的な意味でこのように考えられてきましたが、これは精神的にも全く同等です。人類の精神的なエネルギーが、太陽を通じて放射されているのです。

見方を変えれば、人類は自らのエネルギーで自らを養っているとさえ言えるのです。物理的に必須とされていた太陽のエネルギー源と、我々人類の内面意識のエネルギー源が同一だからです。

一般的な常識では理解できないかもしれませんが、科学が完成していない為に起こる誤解だと思われます。現代科学は物質の根本について何も説明できないのです。

世界中でいろいろな神様が拝まれています。一般の人は神様を見ることができない為、どれを信じていいか判断できません。

しかし、太陽ならば間違いありません。太陽に精神向上の効果があることを疑う人はいないでしょう。太陽の光を浴びれば、暗い気分など吹っ飛んでしまうのです。ですから、人類が拝むべき神様は、太陽なのです。

太陽を胸に思い浮かべるだけで、内面意識は向上します。徐々にですが、霊位が向上するのです。これを継続することにより肉体、精神が若返ります。長時間行なうほど、効果は大きくなります。試してみてください。

ギブアンドギブ

ギブアンドテイクということばがあります。20世紀までは常識と考えられていたこの言葉ですが、私は以前から嫌いでした。ギブアンドギブが正しい発想です。霊位向上の基本原則です。

ギブアンドテイクは与えたら失ってしまうという発想がその原点です。与えたら無くなって

しまうわけですから、その分もらわなければ損してしまうわけです。これ、正しいように見えますが、実は非常識な発想です。我々の生命力や自然環境等、全て与えられているものであり、自ら獲得しているものなど本来無いのです。自力、我力で生きてると錯覚した結果、自分のものという執着心が生まれてくるのです。

生命力でさえ、自分で獲得したわけではないのです。与えられているのです。この当たり前の事実気がつくことが重要です。そうすれば、多少なりとも執着心が薄れるのではないのでしょうか。

本当の原則はギブアンドギブです。与えるのです。与えても失いません。必要なものは入ってくるのです。別に力んで与えろとっているのではありません。力みは歪みですから、避けなければなりません。必要のない物を与えても、相手が迷惑するだけです。必要な時に、必要なものを、必要に応じて与えるのです。本心から与えた方がいいと感じたら、与えるのです。

但し、与えすぎは禁物です。人は努力により向上します。もらいすぎると人は努力を怠ってしまうのです。ですから、適度に与えることが必要です。

我々の想念行為は全て記録のように残っています。我々の存在自体が全体意識の一部にすぎないのです。ですから、環境はその人の過去の想念行為に相応しい状態に変更されていくのです。与えた場合、その事実は確実に記録されているのです。

その結果、内面意識に光が与えられます。積徳量の増加です。内面意識の輝きが強くなるのです。これが霊位向上につながるのです。霊位の向上はあらゆる面で豊かさをもたらします。だからこそギブアンドギブが原則なのです。

20世紀までというのは、ギブアンドテイク、もしくはテイクオンリーの世界でした。奪い合いの世界です。これらは全て、失ったら終わりという発想です。現実には奪えば奪うほど、霊位は下降します。ですから、何も得はしないのです。むしろ傷つけあっている分、損しているわけです。そして人類全体の霊位が下降する結果、社会の安定性が欠落してしまうのです。最近の経済状況や株価動向等、全ての原因はここにあるわけです。

21世紀に入って従来の発想に限界が見えてきました。このままでは資本主義社会は崩壊してしまうでしょう。日米共に株価が極端に下落すれば、経済は間違いなく破綻してしまうのです。

これを防ぐ手立てはあるのでしょうか。もちろんあります。それが霊位の向上なのです。霊位が向上すれば、社会は安定します。歪んだ意識、下方への意識エネルギーを消滅してしまうからです。

一体誰の意識が向上するのでしょうか。もちろん一部の人の意識だけが向上すればいいというわけではありません。他人にぶら下がって生きるのは、正しい生き方ではありません。向上しなければならないのは、全ての人々の意識です。全人類の意識向上が、社会の安定、発展の必要条件なのです。この向上なくして人類に未来はありません。

内面意識が向上すると、自らの力で、周囲を調和させることができるようになります。多くの人がこれを行えば、不調和な状態など瞬時に消滅してしまいます。この原理を知っている人が少ない為、社会が不安定な状態に陥っているのです。我々の環境は、我々自身が作っているのです。

本書により、霊位の重要性を認識して頂きたいのです。そして、霊位の向上に努めて頂きたいのです。その行為が、社会の安定、発展をもたらすのです。

想念の修正

霊位向上には、想念の修正も必要です。想念が調和・安定すれば、内面意識も調和し、霊位は向上します。逆に想念が乱れると、霊位は下降してしまうのです。ですから、霊位の向上には想念の改善が欠かせません。

人の想念には癖があるものです。ところが、この癖が霊位の向上を阻む場合が多いのです。私の場合、精神修養開始後の数年間は、内面意識の声がさりげなく聞こえたものでした。多かったのは「威張るな」「批判するな」「怒るな」等です。元来正義感が強い性格だったからかもしれないませんが、とにかく不正に対する批判精神が強かったのです。しかしこの気持ちも「批判するな」の一言で片付けられてしまいました。

社会の不正と自分の批判とは、全く別次元の話なのです。霊位向上のためには、精神の調和が必要です。批判と調和とは逆方向の意識ですから、霊位は向上しないのです。むしろ壁になって霊位の向上を阻みます。ですから批判してはいけません。

不正に対して意見を持つことは構いません。解決策を考えるのも自由です。しかし批判はいけません。批判精神は破壊的なエネルギーなのです。周囲を傷つけてしまうのです。その結果、霊位も下降してしまうのです。

当時はこのような理屈はわかりませんでした。内面意識がさりげなくアドバイスしてくれたようです。このように想念の癖を修正することにより、霊位の向上を図ることができるのです。

「頑固」もいけません。思いを固めることは、表面意識を強く働かせることです。下方意識の継続ですから、霊位は下降してしまうのです。形式的な思考、先入観等、固定的な発想はすべて下方の意識ですから、これらはすべて霊位向上の妨げとなります。

「素直」が基本です。素直な心になると、内面意識が人を正しい方向に導くのです。素直な気持で生活すると、環境が調和してくるのです。この状態を継続することにより、霊位は向上するのです。

人の意識状態は無数に存在しますから、具体例を挙げてはきりがありません。ですから、どういう精神状態が霊位向上に役立つのか、原則を説明しようと思います。それは次の事実を認識することです。

「人は全体意識から放射された光です。全ての人は平等です。周囲の人も自分も全く等しい価値を有しているのです」

この原則を理解することにより、霊位は向上に向かうのです。周囲との一体化を意識することが、霊位向上につながるのです。この原則に反する意識が、自己中心的な意識、即ち下方の意識なのです。この下方の意識を減少させる努力が必要なのです。

社会の発展には上下両方向の意識バランスが重要です。上方向だけでは個性が育ちません。ですから下方の意識も必要なのです。ただ、現代社会はあまりにも意識が下方に向かいすぎています。バランスが崩れているのです。ですから意識の向上、上方向の意識の重要性を訴えているのです。それが社会の安定、発展に極めて重要だからです。

宇宙との一体化

霊位の向上と意識の一体化は同じ意味です。霊位が向上するほど、周囲の人を他人とは思えなくなります。とはいえ、一般の方々が周囲の人々との一体化を感じることは困難かもしれません。どうすればよいのでしょうか。

意識は習慣です。多くの方は子供の頃から、周囲の人と自分は別だという分離感を当然として受け入れてきました。分離感が習慣になっているのです。習慣は脳に影響を与えるようです。我々の肉体は生活習慣で機能を変化させます。環境に相応しい肉体に変化するわけです。運動選手の筋肉が発達するのもこの原理によります。

脳も同じようです。使い方で状態が変化するのです。ですから一般の方々の脳は、周囲の人と自分の分離感を強く感じるように調整されているわけです。一体感を感じにくい脳に変化しているのです。

習慣は変更可能です。分離感が習慣になっているわけですから、一体感を習慣にすればいいのです。

習慣の変更にはトレーニングが必要になります。周囲の空間でいちばん大きいのは宇宙ですから、宇宙との一体化を観じるのがベストでしょう。効果が大きくなります。

合掌して宇宙全体を思い浮かべ、自分の中にその宇宙を入れてしまえばいいのです。そうすると腕に力が入り、脳に圧力を感じる場合があります。一度に無理せずに、継続することが重要と思われれます。そうすると、徐々に周囲の人との一体化を観じることが出来るようになります。脳には元来、宇宙との一体化を観じるための機能が備わっているようなのです。

周囲の人との分離感が弱まれば、想念、行為も徐々に変化してきます。自己中心的に生きてきた人も、周囲の人のことを考えながら行動するようになるのです。

このような意識の変化は、そのまま霊位の変化を意味します。自己中心的な人が周囲を気にするわけですから、内面意識、霊位は大きく向上することになるのです。

このように、意識の習慣を変更することにより霊位を向上させることができるのです。霊位とは我々の意識のあり方そのものなのです。

宇宙との一体化が可能になると、自分自身の内面に全ての人を観じることができるようになります。全員自分の内面に存在しているのです。多くの人は自分と周囲の人が分離していると思っていますが、誤りなのです。皆つながっているのです。

多くの人がこの事実に気づくと、社会が根本的に変化するでしょう。携帯電話も不要になるのです。内面の世界で、特定の人に向けて想念を送れば、相手の意識上に言葉に翻訳されて浮かんでくるのです。テレパシー能力の活用です。

普通の人には外面世界の生活に忙しいため、微妙な想念に気がつかないのです。能力が退化しているのです。内面意識を多くの人が活用できるようになれば、テレパシー通信が常識化するかもしれません。社会全体が今よりも静かになるでしょう。

霊位の向上により、人間の能力が向上するのです。テレパシー能力もその一例です。多くの人々が意識の向上を目指すことにより、人類全体が新たな発展段階へ到達することができるのです。

信仰による霊位向上

信仰とは何なのでしょう。それは内面意識を憧れの対象へ向けることです。このように、我々は自由に内面意識の方向を変更することができます。そしてその方向に、我々の霊位は移行していくのです。

意識を上方に向けて生きる人の内面意識は輝いています。上位へ行くほど、輝きが強くなります。菩薩界レベルまで到達した人は、他の人とは違った高貴な雰囲気を出し出すこととなります。オーラの放射です。多くの人から好かれるようになります。

一方、意識を下方へ向けて生きる人の内面意識は曇ってしまいます。自己中心的な人や、悪い意味での競争好きな人等がこれに該当します。ですから、我々は意識を上方に向けて生きる必要があるのです。

現代の憲法では、信仰の自由を認めています。ですから何を信じてもいいのですが、対象は霊位の高い人でなければなりません。霊位不明の人を信仰の対象にするのは危険です。対象となる人の意識が下方に存在する場合、信仰する人の意識も下がってしまうからです。低い方向に意識を向けることになるため、霊位が下降するのです。

何故このようなことを書くのかといえば、新興宗教の中に、このようなケースが多いからです。教祖の霊位が低い場合があるのです。このような信仰は、知らないうちに、自らの霊位を下げてしまいます。内面意識が曇ってしまうのです。ですから、我々は正しい対象を信仰すべきです。

日本が過去十五年間で大きく徳を失った原因の一つは、誤った宗教信仰のようです。信仰の対象を間違えると、多くの人々の霊位が下降するため、国家全体の積徳量が大幅に減少してしまうのです。結果的に国全体の生命力、勢いが減少し、景気も低迷してしまうのです。

人の霊位は不変ではありません。自力で菩薩界上位に到達した方ならば問題ないと思われませんが、それ以下の場合、心がけ如何によっては、霊位が大幅に下落してしまう場合もあります。精神修養を重ねて立派な人格者になったように見えても、その後名誉欲、金銭欲等から墮落してしまうケースがあるのです。ですから、生者を信仰対象にすることは危険が大きいのです。

21世紀の現在、人類にとって最も高い位置にある光は太陽です。ですから、もし意識向上のために何かを信仰したいと思うならば、対象は太陽にするべきです。太陽なら間違いありません。意識は必ず上方を向くのです。

形式は不要です。電車に乗っている時間等、暇なときに太陽を思い浮かべて「ありがとうございます」と祈ればいいのです。形式は定まっていません。自由に祈ればいいのです。これを繰り返すだけで、内面意識は向上するのです。霊位は徐々に上昇するのです。その結果、内面から輝いてきます。人間は本来光なのです。輝いているのです。そのために効果的な方法は、太陽との一体化を目指すことなのです。

宗教の正邪の見分け方

数多くの宗教団体が存在する日本では、その正邪を判別するのは容易ではありません。何をもちて判断すればよいのでしょうか。

オウム真理教のような犯罪集団が邪教なのは明白です。しかし、こういうのは稀です。一般の団体で見分けるポイントがあるとなれば、それは雰囲気、光、オーラということになるでしょう。霊位が高い人、本物でなければオーラを放射することができないからです。

教祖やその教団にいる人の雰囲気で判断することが重要です。正しい教団は霊位の高い人が多いため、明るく朗らかな雰囲気をしています。こういう雰囲気なら大丈夫でしょう。また伝統的な宗教も大丈夫だと思います。人間性を向上させる働きが、長い歴史の中で証明されているからです。

日本は仏教国だからかもしれませんが、教義、教説が宗教の正しさを意味するように思われています。しかし、この考え方は正しくありません。文章は誰にでも書くことができます。教義、教説は立派に見えても、その教祖が悪霊のごとき存在と化している場合があるのです。これらの宗教を信じたら大変です。常に意識は下方を向いてしまいますから、霊位は大幅に下降してしまいます。人間としての力があらゆる面で下降してしまうでしょう。ですから、このような宗教は何としても避けなければなりません。

また、人に何かを強制するような団体は危険です。人は本来自由ですから、正しい宗教は強制しません。強制は表面意識、下方意識の働きですから、過度に継続すると霊位は下降してしまうのです。正しい宗教はこの事実を知っているのです。強制、圧迫を感じる団体からは、離れた方がいいでしょう。

また、教祖の力が専制君主のごとく絶対的な団体は危険です。全ての人は全体意識から発生

した光です。ですから根本的に平等なのです。精神的な成長度合に差があるだけです。霊位が向上すれば自然に理解できることです。真の宗教指導者は当然このことを認識しているため、自分を偉く見せることができないのです。見かけ上の偉さは未熟な精神の反映です。ですから絶対的な権力者に正しい宗教家はいないのです。

もし正邪を判別できないならば、無理に宗教にこだわる必要はないでしょう。人は皆生まれつき地球人類という宗教に入っているのです。ここでは日常生活における想念、行為が全て評価対象となっているのです。常に社会全体の為に努力する人は向上を続けることができ、逆の人は下降を続けるのです。

21世紀はこうした原理に全ての人が気づく時代なのかもしれません。今後、従来の形式的な宗教はその重要性を失っていくでしょう。全ての教えは我々自身に内包されているのです。自身の良心に従うことが、最良の心掛けといえるのです。

一神教と多神教

世界には多くの宗教があります。大別すると一神教と多神教です。どちらが正しいのでしょうか。

如来界は不思議な世界です。この世界は一即多が実現しています。個であり全体なのです。この世界の意識は個体としての自主性があるのですが、同時に全体でもあるのです。全体というのは複数の意識の集合体です。ですから如来界レベルになると、自らの意識を多数に分割して働かせることが可能になります。

要するに、全ての人の意識は如来レベルの意識から発生しているわけです。ですから、全ての人は本来一体なのです。

結局、一神教と多神教というのは、見方の違いにすぎないのです。全体意識をみれば一神教の方が正しいようですが、如来レベルでは多数の意識が出現しているのです。如来も全体意識から放射されているのです。ですから、如来を信じて、全体意識を信じて、どちらでも構わないのです。両方正しいのです。

意識を上方に向けるというのは、この全体意識に回帰する方向です。全体と一体化する意識の方向です。全体と一体化するためには、自己中心的な意識が残ってはだめなのです。自分さえよければいいという発想で、意識の一体化が実現できるはずはありません。

現代人は自らの発生源を完全に忘れ去っています。ですから多くの人が自分勝手に生きているのです。もちろん個性は尊重されなければなりません。しかし、自分さえよければ他人がどうなっても構わない、という発想は本来存在しないのです。誤りです。

霊位の向上は、本来の自分を取り戻すための努力です。意識の発生源へ戻ることなのです。発生源に近づくにつれ、本来の能力を取り戻すことができます。霊位の高い人物や神霊の能力は、本来全ての人々が持っていたのです。想念行為の低下により霊位が下降したため、この能

力を失ってしまったのです。

霊位向上の努力が全ての人に必要となる理由はここにあります。高次元は我々人類にとって共通のふるさとです。ここへ回帰することにより、足元の安定した社会を構築することができるのです。現代社会の不安定さは、人類が自分自身を見失ったことが原因なのです。自分を取り戻すことが、社会の安定、発展につながるのです。

第九章 向上の軌跡

ここでは、本書執筆までの経緯について簡単に説明したいと思います

脳の活性化

本書の内容の根拠としているのは、自分自身の認識力です。内面意識に全ての存在を捉えることができるのです。映像化できるわけではありませんが、雰囲気・波動として感じることができるのです。

一朝一夕で身に付いた能力ではありません。1985年から精神的な訓練を始め、徐々に能力が高くなっていったのです。

当時は明確な修行方法など知りませんから、思いついたことは何でもやっていました。宗教関連の書物も数多く読みました。そのうち、不思議な法則があることに気がつきました。悟りを開く人は、宇宙との一体感覚を得るようなのです。

悟りを開いた結果、宇宙と一体化する。それなら最初から宇宙との一体化を目指せば、悟りが開けるのではないかと考えました。単純な発想でしたが、実はこれが正しかったようです。

ヨーガの呼吸法や精神統一をやりながら、宇宙との一体化にも取り組んだわけですが、もちろん肉体が宇宙と一体化するわけではありません。内面意識を宇宙と一体化させるのです。

これは大変でした。自分の中に宇宙を全部入れようとするのですが、なかなか入りません。はじかれてしまう感じです。入れる領域を広げれば広げるほど、反発力が強くなるのです。諦めずに合掌しながら集中しつづけると、脳に圧力がかかってきて、爆発しそうになるではありませんか。全宇宙を自分の中に取り込むというのは、容易ではなかったのです。

霊位が低いと内面意識は全体と一体化することができません。習慣的に内面意識が肉体という狭い領域に閉じ込められて、光が弱くなっているためです。自己中心的な想念行為を繰り返した結果、周囲と一体化することができなくなっているのです。高次元に回帰するためには、自己中心的な想念行為を改め、全体に回帰する想念行為、即ち積徳行為を繰り返す必要があります。そうすれば光が強くなり、高次元、全体意識に回帰することができます。

学生で暇だったこともあり、これを頻繁に繰り返していました。すると異変が起こったのです。脳が動き出したのです。脳幹が振動しはじめたのです。何か化学物質を出しながら、ブルブル振動している感じでした。

大学の試験の時でしたから、1986年初頭でしょうか。試験帰りの電車の中でも脳が激しく振動しているのです。普通なら医者に駆け込むところかもしれませんが。しかし気やチャクラなど、目に見えない存在を理解しはじめていた為、これらを見捨てている現代医学に対し、このころ既に懐疑的になっていたのです。ですから医者に頼る気にはなりません。どうせ何もわからないだろうと思ったのです。

自分で脳に刺激を与えた結果、脳が動きだしたわけですから、ある意味当然の結果だったわけです。人間のからだはうまく出来ています。無駄な動きはしないだろうと考えたのです。

この変化はこの後、止まることはありませんでした。脳幹の振動が落ち着いてからも、脳の中にピリピリと何かが流れている感じです。理系学生だったこともあり、左脳が発達していたようです。左側にはよく流れるのですが、右側には殆ど流れません。

流れがよくなると、頭の回転が速くなるようです。四年の輪講で発表したあと、「機関銃みたいなしゃべりだった」といわれてしまいました。高校生の頃、早口だといわれたことは一度もなかったのです。

徐々に流れがよくなり、現在では左右の流れにそれほど差はありません。脳が動いているという自覚は殆どありません。活性化されているといった感じです。柔らかいのです。気がスムーズに脳の中に溶け込んでいく感じです。

さらに特徴的なのは、内と外の壁が無くなることです。自分自身の意識が外へ自由に動いていける感じなのです。ですから、肉体の中に自分自身が閉じ込められている感覚は殆どありません。これは脳の覚醒当初から徐々に感じはじめていました。脳の変化は意識の変革をもたらすわけです。

ほとんどの人は「人間は肉体である」と子供の頃から教わって生きています。この思い込みが脳に影響を与え、内面意識を肉体の内側に閉じ込め、固定化しているようです。ですからこの感覚は絶対ではないのです。人類の長年の思い込みが生み出した癖にすぎないわけです。変更可能なのです。だからこそ「宇宙と一体である」との意識を繰り返すことにより、脳に変化が起こったのです。宇宙との一体化は可能だったのです。

もちろんこの間、精神的な修養は欠かしませんでした。欠かせなかった、という方が適切かもしれません。

1986年になってから、「般若心経」を唱えたりしていたのですが、しばらく続けるうちに、体に異変が起きました。体の中で何かが動こうとしているのです。私の意思ではありません。

「動きたいなら、動かしてやるか」

と思い、体の力を抜いたのです。すると数秒間プルプルと体が振動した後、フッと何かが体からぬけたのです。

「終わったな」

と思い、読経を続けると、再び何かが動こうとするではありませんか。力を抜くと、体が震えた後、何かが抜けていくのです。結局この震えを、読経を止めるまで繰り返さなければなりませんでした。

一体何が起きていたのでしょうか。未浄化な意識（霊）が、私の体の中にはいつてきたのです。そして私の体の中で清まり、抜けていったのです。

脳の覚醒は、意識の広がりをもたらす一方、体質を霊的な存在と交流しやすいものへ変化させるようです。

読経による高次元への意識集中により、光が体内に流れ込みます。この光と未浄化な霊が、

肉体内で合流し、浄化が行なわれたのです。無意識のうちに浄霊を行っていたのです。

脳の覚醒には、このように見えない存在との交流を深める働きがあるようです。ですから、この頃から、いやでも精神的な修養を行なわざるをえなかったのです。

菩薩界入り

この体験以降、霊的な存在を認めざるをえなくなりました。自然と目標が自分の内面の向上へと向かっていったのです。

各種の書物から、浄霊をすることは陰徳であり、自分自身の向上にもつながるらしい、との知識を得たため、祈りや浄霊を頻繁に行なっていました。経典を唱えなくても、「ありがとうございます」等の素直な祈りは、高次元に直結するため、浄化する力が強いのです。

学生時代はこの程度の認識でした。自分ではいろいろ修行しているつもりでしたが、振り返ってみると、霊的な認識、理解は浅かったと思います。積徳量も不十分でした。霊位も上級霊界レベルだったようです。人間の本質についての理解も不十分でした。

1990年、社会人2年目の夏休みに「生長の家」の聖典『生命の実相』（谷口雅春著、全40巻）のうち、20冊程度を一気に読みました。

内容は「物質は存在しない」「病気は存在しない」「人は神の子であり、無限の可能性を有する」等です。いずれも真理ですが、このことに対する理解を深めたことが、後の向上に大いに役立ったようです。（尚、私は「生長の家」とは何の関係もありません。書物を参考にしただけです）

それまで私の内面意識は、霊的な存在と物質の存在を両方とも肯定していたようです。物理学等から、物質が波動にすぎないという知識はもっていたのですが、実感できていなかったようです。中途半端な認識だったのです。

現在では物質の存在は意識が生み出していると考えています。意識抜きは物質は存在しません。当時はこのことが理解できていませんでした。

この時から、内面意識の向上速度が上がったようです。生活リズムは従来通りでした。会社の勤務以外では、浄霊と祈りを中心とした生活を送っていたわけです。徐々に向上を続けました。

1993年8月に変化が訪れました。精神統一をしていた時、「あと少しで壁を突破できる」と感じたのです。合掌しながら祈り続けると、何かを越えた感じがしました。その時から内面に変化が生じたのです。

自分の内面に意識を向けると、まぶしく感じるのです。それまでこのような感覚はありませんでした。この時以降、内面に意識を向けるだけで、いつでもまぶしく感じるのです。この時によりやく菩薩界入りを果たしたのです。

「せっかく向上して魂が肉体から離れたのだから、再び下降しては意味がない」

と思い、腹に力を入れないように生活しました。人は作業に集中する場合、気合を入れます。腹に力を入れるのです。しかし、これは生命力の消費量を増やすことに他ならないわけです。

霊位向上を目指していた私はこれを避けたのです。当時は向上の為なら何でもしようと考えていたのです。

この状態を継続した結果、カラオケにいてもまともに声を出せなくなってしまいました。腹に力がはいらないのです。魂が離脱している感じでした。しかしこの間、内面意識は確実に向上を続けていたのです。

更なる向上

生活は相変わらず同じリズムを続けました。平日は会社で仕事、休日は休息をとりつつ、祈りや浄霊を行なう、といった調子でした。

このように書くと、会社にいる時間が精神向上の障害になっているようですが、そうではありません。忙しい場所というのは歪んだ意識、想念の溜まり場です。人々の意識がエネルギーになって渦巻いているのです。ストレスの根元はこの歪んだ下方の意識エネルギーです。これが人の肉体、精神を傷つけるのです。

会社にいる間は、無意識のうちに、自らの光でこの歪みを消滅していました。歪んだ精神エネルギーは消滅の際、物理的なエネルギーに変換されます。このエネルギーは肉体の不快感として感じられます。ですから会社にいる間は、肉体の痛み、苦しみ、圧迫感を感じながら過ごしていたのです。

一見何のメリットも無い状態のように見えますが、これも修行のひとつなのです。これらの経験を通じて、内面意識は光を徐々に強くしていくのです。霊位が向上すると、浄化する力が強くなります。時が経つにつれ、徐々に浄霊する力が強くなる感じがしていました。

1997年頃から状況が変化しました。修行段階が完了したと感じたのです。これからは本番という気がしました。具体的に何をするのかイメージは湧かないのですが、そのように感じたのです。暫くしてから意味がわかりました。内面意識による本格的な活動が始まったのです。

具体的な例を第六章に記述しました。信じることでできる人は少ないかもしれませんが、全て事実です。霊位を向上させれば、人が神霊のように働くことができるのです。

霊位の向上は更に続きました。そして1999年が一つの節目になったのです。菩薩位の方は大勢いますが、中でも最高位にあったのは釈迦のようです。イエスの意識もほぼ同位です。これらの方の意識は菩薩界四上位に位置しています。

1999年の7月頃、私の霊位は釈迦を超えてしまったようです。とはいえ、さらにレベルの高い意識は無数に存在するのですから、自惚れても仕方ありません。一つの節目を越えたのです。単にそういうことです。

2000年に入ってから霊位の変化はすさまじいものでした。毎日のように霊位が向上するのです。それまでは数ヶ月に一回、向上を認識できる程度だったのですが、急激に向上速度

が上がったのです。そして九月には、菩薩界を超えて如来界に突入してしまいました。

如来界は個体意識が同時に集合意識として存在している世界です。自らの意識を分割して活動することが可能なのです。また、この世界の意識は周囲の意識と本来一体であることを認識しながら、個として活動を行なっているのです。

2001年1月には、内面意識が太陽と一体化してしまいました。太陽とは如来界レベルの意識だったのです。太陽が人類全体であり、私自身の本体でもある、という感じなのです。もちろん、常に一体化しているわけではありません。内面意識が上昇すると、一体化することができるのです。

太陽と人間の発生源は同じだったのです。太陽と人間はつながっているのです。全ての人間も内面では一体なのです。

内面意識が如来界に到達すると、世界の構成原理も徐々に理解できるようになります。如来界で様々な秩序、ルールが構成されていたのです。ですから、霊位の向上により、如来界に内面意識を到達させることが、人類の発展にとって極めて重要なのです。

従来、科学と宗教は対立する概念と考えられてきましたが、それは我々の理解が浅かったためです。両方とも意識の存在抜きには成立しません。意識に関する理解を深めることにより、科学、宗教が同じことを意味していることに気がつくのです。そして、それは生命力の法則の発見につながります。科学、宗教、生命力の法則を一体化することにより、経済問題をはじめとするあらゆる社会問題の解決が可能となるのです。

本書でその基本的な考え方を説明しました。しかし研究は始まったばかりです。更に理解が進んだ段階で、新たな発表を行なう予定です。

滝沢 輝 (たきざわあきら) の経歴・活動実績

- 1985年 宗教家としての活動を開始。
- 1989年 東京大学工学部卒業、三井銀行（現三井住友銀行） 入行
- 1994年度 「これから情報通信革命が起こる。パソコンが銀行になる。システムを戦略部門にすべきである。」 と（さくら）銀行に提言。この後、さくら銀行は日本初のインターネット専門銀行（ジャパンネット銀行）を設立する等、IT戦略で銀行業界のトップを独走。この動きが各産業界へのIT導入や日本のIT戦略へつながった。
上記提言が日本のIT戦略の原動力になったのである
- 1995年6月 総合企画部配属。ALM担当。
- 1999年7月 霊位が釈迦、イエスを超える。
- 2000年6月 5次元等研究のため、退社。
- 2000年12月31日 ピラミッド形（万物の創造原理、かつ磁界エネルギー（人の活動エネルギー）生成装置を天より授かる。
イエスの再臨である。
- 2001年9月 「釈迦を超えた日」を出版。5次元を提唱。
- 2003年2月 「5次元理論」を出版。世界がフラクタル構造（点に空間が内包されている構造）であることを理論的に解説。5次元導入による物理学の全面的な改定作業の必要性を提言。本書の出版が人工知能の大幅なレベルアップにつながった。ディープラーニングは本書が提言したフラクタル構造の応用である。
- 2003年6月 「マイナス金利の導入」を著述。
世界で最初にマイナス金利の導入を提言したのは本書である。
本書が世界のマイナス金利の原点である。
その結果、2014年にヨーロッパでマイナス金利が導入された。
また、日銀は2016年にマイナス金利を採用した。
本書では日本経済再生のため、経済の新理論を発表。名目経済成長率と金利水準が一致すべきであることを理論的に解説。1990年代以降の不景気の原因が、高すぎた金利水準であることを同時に証明。金利水準と名目経済成長率の関係を逆転させることにより景気・財政の回復を図るべきだと主張。
本書を政府・日銀等に送付後、金利を下げるべきとの認識が国内に広まり、景気回復・失業率低下の原動力となる。
アベノミクスの骨子である低金利高経済成長率政策は、「マイナス金利の導入」の無断コピーである。
- 2004年1月 フラクタル構造に電磁波を蓄える性質があることが確認される
（朝日新聞の1面に掲載）。
「5次元理論」の内容の一部が学術的に確認されたことになる。
- 2005年 「5次元理論」の続編の執筆を開始。基本構造について、日本物理学界等へ送付。
- 2005年 天界入りを果たす。（天界は守護神霊（各種宗教の本尊クラス）の世界）
- 2006年11月 「5次元理論 ～その2」を著述。日本物理学会等へ送付。
- 2007年 「貨幣へのオプション概念の導入」「外国為替理論の再構築」を著述。各方面へ送付。
- 2008年6月 人類救済のため、「輝の会」設立。「人類救済の基本原理」を発表。
- 2009年8月 「フラクタル経済理論」を著述。バブル発生理由の理論的解明に成功。
- 2009年10月 「5次元理論 第3巻 認識の原理」を著述。5次元のアウトラインを解説。
- 2011年10月 「5次元理論 第4巻 宇宙の創造原理」を発表。
- 2011年11月 創造神界入りを果たす。
- 2011年12月 「長寿サービス」をスタート。人類の長寿化開始。キリスト教の千年王国の実現である。
- 2011年12月 「磁界エネルギー（オーラ）発生装置」を発表。磁界エネルギー（オーラ）を機械的に生成することに成功。
- 2012年2月 「5次元理論 第4巻 宇宙の創造原理」を日本物理学界へ送付。
- 2012年7月 野田首相に「原子力発電全廃は必須」というタイトルの提言を実施。そ

の結果、2012年9月14日に「2030年代に原発稼働ゼロ」を目指す新しいエネルギー政策「革新的エネルギー・環境戦略」が政府から発表された。

- 本提言が、日本の原子力政策を正しい方向に導いたのである。
- 2012年11月 「フラクタル経済理論 第2巻」を発表。貨幣制度廃止の必要性を解説。その実現のために貨幣保有期間上限設定政策を提言。
- 2012年12月 全世界の人々に 就業可能日数 の提供を開始。その結果、失業率が大きく改善した。
- 2013年7月 台風消去サービス提供開始。
- 2013年11月 金運サービス提供開始。金運生成方法等を公開。
- 2014年2月 生まれ変わり に関する解説文記載開始。
- 2014年3月 ご祈願 提供開始。
- 2014年9月 先祖金運サービス提供開始。
- 2014年10月 エボラ出血熱消去に成功。3868人の命を救済した。
- 2015年6月 喜びオーラ 提供開始。
- 2016年7月 序列運 提供開始。
- 2017年2月 序列運診断 提供開始。
- 2017年8月 愛され運 提供開始。
- 2018年3月 愛され運診断 提供開始。
- 現在 輝の会会長

ホームページ <http://taki-zawa.net> （「輝の会」で検索して下さい）

メール info@taki-zawa.net

Copyright ©Akira Takizawa all rights reserved.